

## 【翻 訳】

ローラント・フライモント著

グスタフ・フライタークに与えたチャールズ・ディケンズの影響(1)

鈴木敏夫

これは、

Roland Freymond: Der Einfluß von Charles Dickens auf Gustav Freytag. Mit besonderer Berücksichtigung der Romane "David Copperfield" und "Soll und Haben". Prager Deutsche Studien Band 19. Herausgegeben von August Sauer. Verlag Dr. H. A. Gerstenberg Hildesheim 1973

を現在の著作権所有者ゲルステンベルク書店の許可を得て翻訳したものである。但し分量の関係で2回に分けて掲載することにした。原文では各頁毎脚注が付してあるが、訳文掲載書のサイズを考慮し、原注に通し番号をつけ各節毎に一括して記載した。また訳者の判断で付した注は本文中に括弧付きで組み入れた。

## (献 辞)

この論文を作成するに当たり、私は尊敬する師、教授アウグスト・ザウアー博士の励ましを受けた。教授が不断に示された温情のこもった関心と論文の印刷に当たり示された助言と尽力に対し衷心からの謝意を表明することは私の義務たるにとどまらず、切なる欲求でもある。

さらにライプツィヒの書店主ゲオルク・ヒルツェル博士にも感謝を申し上げなくてはならない。博士はザロモン・ヒルツェル一家宛てのグスタフ・フライタークの書簡を利用することに厚意を示されたのである。

エルベ河畔アウシヒ (チェコ) にて1912年復活祭

ローラント・フライモント

## 第一章 フライタークに与えたチャールズ・ディケンズの 影響, その前提条件

### 第一節 序説 (ドイツ人の生活とドイツ文学に与えたディケンズの影響)

グスタフ・フライタークはグレンツポーター誌掲載論文<sup>1)</sup>で「ボズ (訳注: Boz ディケンズの初期のペンネーム) が我々の間に初めて知られたのはドイツでは1837年, つまり酷寒のごとき不愉快さの支配する時代であった」<sup>2)</sup>と述べている。数多くの領邦国家へのドイツの分裂はこれまで以上に激しく全ての人々の力と自信とを震撼させた。連帯感に完全に欠けていた。「若い世代は感激と献身との身近な対象を何一つ有してはいなかった。それ故にこそ若い世代は反抗的, 酷評的, 革命的に振舞ったのである。」<sup>3)</sup>

このような状況全体はその反響を文学に見出すのであるが, 1838年頃の文学の特徴をグリルバルツァーは「空想力に欠けかつ人為的である」<sup>4)</sup>と記したのであるがけだし当然と云える。人々は正しい道を求めたが見つからなかった。時代を叙述する若い世代はそのお手本をフランス人に求めた。「お喋りをする代りに人々は噂話を書き, 自分の故郷の上流階級の女性の平凡さに腹を立てながら, まるで訳の分らぬひどく込み入った感情をいさぐコケットなパリ女と伯爵夫人連の姿を案出するのに苦しんだ。」<sup>5)</sup>

そこへディケンズの『ピクウィック遺文録』がやってきたのである。そしてフライタークは我々に物語るのである。この長編小説がいかにも迅速に全ての町々に拡まったか, この小説がいかにも人々に愛好され, またいかにも喜ばしき効果をおさめたか, を。生の気分と生の喜ばしき解釈が高まり, イギリス人の晴々として, 寛ぎかつ健康な生き方に感激して人々は不快なもの, 陰鬱なもの

のを投げ捨てようと試みた。それはみずみずしく快活な前進への励ましであった。

ディケンズ晩年の小説の影響は劣らず大きかった。その影響力はさらに高まり、ディケンズはドイツではイギリスでよりもさらに素早い反響を見出したとさえ主張されたのである<sup>6)</sup>。ディケンズは諸手をあげて歓迎された。彼の政治的影響力も劣らず評価された。彼の小説通してドイツ人は先入観にとらわれずイギリス人の本質を知り、評価することを知った。

ディケンズはとりわけドイツ文学に深刻にして永続的な影響をおよぼした。彼によって健康でありたいという衝動は促進された。彼の道徳的感覚と写実的観察法、彼の人間愛と上流階級の特権に対する憎悪、彼の「力強く、不断に翼を揺さぶる空想力」<sup>7)</sup>は青年ドイツ派の傾向にそっぽを向いた若い世代の詩人達を稔り豊かにした。人々は政治や芸術に関する長たらしい話題、離婚の権利についての数多の論議などに耳を傾けなくなかった。人間感情のいつ儘とも知れぬ分析が反吐の出そうな思いにさせたのである<sup>8)</sup>。「技巧の凝らし過ぎ、恐るべき大仰さ、苦し気なところ、醒めた陶酔、内容の無形式と形式の無内容、これら全てが現代文学を特徴づけている」<sup>9)</sup>という状態は永続できなかつた。ことごとくとりわけディケンズの小説の侵入を端緒とする一つの変革に至らざるをえなかつた。

この影響がもっともはっきりと現れたのは直接的な模倣である。こうしてドイツには、シュトレ (訳注: Ferdinand Stolle 1806—1872) の『ドイツのピクウィック遺文録』やヘスライン (訳注: B. Heßlein 不詳) の『ベルリンのピクウィック・クラブ会員』その他の作品が出版された。その際人々は18世紀のイギリス小説ダニエル・デフォーのロビンソン・クルーソーが大陸で見出したもっと多数の模倣作品のことを想起するであろう。

しかしまたかなり多くの一人立ちしたドイツの小説作家がディケンズをお手本に育ててきた。ミールケ (訳注: Hellmuth Mielke: Der deutsche Roman des 19. Jahrhunderts. Braunschweig 1890) はアレクサンダー・フォン・ウンゲルン—シュテルンベルク (Alexander von Ungern-Sternberg) の『ディアーナ』(Diana)<sup>10)</sup>におよぼしたこのイギリス人の影響を見抜いている。ヴィリバルト・アレクシス (Wilibald Alexis) の風俗画とユーモアはミールケにディケンズの芸術を想起させた<sup>11)</sup>。ハックレンダー (Hackländer) においてミールケは素描の取り扱い方にみられる同じような熟達ぶりを見つけている<sup>12)</sup>。シュピールハーゲン (Spielhagen) は多分ディケンズの教え子である。ハックレンダーとシュピールハーゲンは特に微妙に「心的な気分を風景像の中に反映させること」を心得ていた<sup>13)</sup>。ホルタイ (Karl von Holtei) はその『浮浪者』(Vagabunden. 4 巻, 1851) のために『ニコラス・ニクルビー』(Nicholas Nickleby. 1838/39) を手本とすることができたであろうし、フリッツ・ロイター (Fritz Reuter) のような自然な天才ですらディケンズに強烈な刺激を見出した。

ユーリウス・ローデンベルク (Julius Rodenberg 1831—1862. ドイツの作家) はこのイギリスの巨匠と類似の傾向を擁護している。両者とも貴族と富裕さに敵対し、貧者と弱者の味方をし

ている<sup>14)</sup>。オットー・ルートヴィヒ (Otto Ludwig) の短編はそのユーモラスな調子の点でこのイギリス詩人の長編との類似を示している<sup>15)</sup>。その本性においてディケンズと最も親密なのはヴィルヘルム・ラーベ (Wilhelm Raabe)<sup>16)</sup>とフライターク (Gustav Freytag)<sup>17)</sup>である。フライタークにおいて人々は文学がどん底にある時代には、健全な現実文学への動向をもっとも多く感ずる。すなわちディケンズの芸術が及ぼすことのできた一番高貴な影響である。

### 第一節の注

- 1) “Grenzboten” Jahrgang 1870. Nummer 26. Gesammelte Aufsätze II. S. 240.
- 2) Blätter für literarische Unterhaltung. 1839. I. S. 388. Literarische Aufsätze Nr. 7. 8. 12.
- 3) Freytag. a. a. O.
- 4) Grillparzers Werke (in 8 Bdn. Cotta) VII. S. 183.
- 5) G. Freytag. Gesammelte Aufsätze. II. 240.
- 6) Blätter für literarische Unterhaltung. 1839. I. S. 388.
- 7) Hellmuth Mielke, Der deutsche Roman des 19. Jahrhunderts. 『十九世紀のドイツ小説』 Braunschweig 1890. S. 116. (以下 Mielke と記す)
- 8) ebd. S. 120.
- 9) Otto Ludwig VI. 82. Für den Hinweis auf den wichtigen Aufsatz von Otto Ludwig bin ich Herrn Prof. Dr. Brotanek zu Dank verpflichtet.
- 10) vgl. Mielke, S. 120.
- 11) vgl. Mielke, S. 126.
- 12) vgl. Mielke, S. 169.
- 13) vgl. Mielke, S. 118.
- 14) vgl. Mielke, S. 187.
- 15) vgl. Mielke, S. 160.
- 16) vgl. Mielke, S. 244. 245.
- 17) vgl. Mielke S. 239 f.

## 第二節 二人の作家の個性の比較

### a) 彼らの活動, 見解, 傾向, 文学の方向における類似

ディケンズとフライタークは多くの点で非常に似通っている。フライタークはこのイギリス人の作品に初めて没頭した際すでにこの作者に惹かれるのを感じずには居られなかった。ディケンズはジャーナリスト流儀で下書きに着手し、そこから徐々に彼の偉大な社会的長編小説が成立していったが、この長編の出所を決して否定しなかった<sup>1)</sup>。フライタークもまた、長編小説の広大な原野に足を踏み入れるためにジャーナリストの活動を行なった。ここで彼はドラマの分野よりも立派に、また彼のグレンツボータンの論文よりも一層詳細に、「時代に対する彼の理解と、彼が上機嫌の折に持ち合せていたものを、充分、豊かに表明することができた。それは詩的な物語において可能になるものである。」<sup>2)</sup> 彼は先づ第一に自分の属する民族の生活を描きたいと思った。このことはまたディケンズの考えの中にもある。この両作者は同じ領域、つまり社会小説におい

て出合うのである。ディケンズは勿論市民階層と並んでより下層の、最下層の生活を描いた。フライタークは一層市民階層に自己を限定した。しかし彼はまた貴族の生活も、宮廷生活も、しかも本当に不利な光を当てて描いた。この点でフライタークはまたしてもディケンズと落ち合った。ディケンズは上流階級にまったく特別な偏見をいいていた。微笑を浮かべながら人間の欠点を易々と見逃していくことのできた彼は、貴族や勲爵士たちの墮落や下劣な行為を面白そうに見せていた<sup>3)</sup>。カザミヤン（訳注：Louis Cazamian, *Le roman social en Angleterre 1830—50 Paris 1904*）はディケンズについて適確にこう言っている。「貴族のエゴイズムは悪しき社会の主要な原因のように見える。」<sup>4)</sup>と。フライタークの態度は中庸で自由主義的である。この態度はしばしば彼のロマンの中に表現されている。『借方と貸方』の商人は〈特権階級〉を非難し、『失われた筆跡』の中の教授は王座に就いた暴君を非難する<sup>5)</sup>。

両作者の長編では個々の階層の代表者が典型的な身分観を持して叙述される。苛酷な人生の学校で教育されたディケンズにあっては我々は急進的な民主主義を感ずる。彼は貧しい人々、財産の無い人々を愛し、富と階級的特権を憎むのである。

こうした態度、こうした見解からこの作者達は彼らの傾向、指導的理念を主張する。この理念はフライタークにあっては特に目立って前面に出てくる。ここでは一方において再び、その著作でもって一つの特別に傾向的な意図を追求するジャーナリストの存在が主張される。他方では、後になって嫌悪する青年ドイツ派とフライタークの関係が主張される<sup>6)</sup>。別な点で彼は当時すでに青年ドイツ派と絶交していた。彼らとは反対にフライタークは芸術的構想をもち、現実的、实际的、健全な状況に構築されたストーリーを好んだのである<sup>7)</sup>。

ディケンズにとって、自分の読者にジョン・ブラウディー（John Browdie）やミスター・ペゴティー（Mr. Pegotty）のように実直で善意ある人物の存在を知らせることは楽しみであった。彼の意図をディケンズは別な方法で認めさせた。少年時代の非常に早い時期から彼は人生の悲惨さを見てきた。この上なく不快な境遇で血路を拓いてきた。彼の処女作がその真価を認められたので、彼はその後の長編に指導的な理念を組み込んだ。その際彼は自己の青春体験を拠り所とした。彼はイギリスに、社会、学校、裁判権行使の欠陥を知らしめようと努力をしたのである。彼は長編の読者に、どんな所とまた何を改善しなくてはならぬかを示した<sup>8)</sup>。そこには『デイリー・ニューズ紙』の主張と同じ傾向があった。同紙はもっとも広い意味で急進的な改革思想に味方する新聞である。この報道機関は暫くの間ディケンズに主宰されていた。我々はつまり、ディケンズにおいてもジャーナリズムが大きな役割を占めているのを見るのである。ディケンズが悪しきこと、脆きこと、弱点や欠点に人々の目を向かせている一方、フライタークはその反対のことを目指していた。『借方と貸方』の中でフライタークは自国民に「喜ばせ、心を高めるために、国民の有能さを映す鏡を」見せてやろうと思うのである。彼はドイツ人の自己評価を高めようと思っている。すでに『借方と貸方』のモットーに我々はこの見解を知っている。つまり「この小説

はドイツ民族の姿を、その有能さの見出されるどころ、民族の労働の中に見出さなくてはならない。」このようにしてフライタークは実際『借方と貸方』で堅実な大商店の生活、商店主から商店のもっとも身分の低い使用人にいたるまでを描き出すのである。彼はドイツ人の勤勉さとドイツ的秩序、清潔さと文化とがどのようにして新しい領域を開墾することができるかを示している。

しかしまた彼は良い点ばかりを見ていたのではない。『借方と貸方』で彼はユダヤ人の不当利得行為と誤った投機心をやっつけている。さらにまた『失われた筆跡』で彼は貴族の尊大さを酷評している。彼は嫌悪の念をもって宮廷生活とそこでの陰謀を槍玉にあげている。その代りに彼は疲れを知らぬ農民の健全にして安定した労働と、撓まぬ学者の勤勉さを評価している。フェルク (Vera Völk) がフライタークの際立った訓戒的傾向を指摘しているのは当然のことである。この傾向はそれが貫徹される時明白になり、一方ではジャーナリスティックな活動によって喚起され、他方彼の気質と国民性に根差している<sup>9)</sup>。ディケンズはそれに対して一層直接的に、表面上なんの意図もなく読者に効果を及ぼすのである。彼の主要な理念は完全にストーリーに転換され、その教訓的脱線を彼のロマンに見出すことは極めて稀である。一方フライタークは例えば人間の善意の不壊<sup>10)</sup>、もしくは合理的な農地経営の価値<sup>11)</sup>といった事柄について相当長い脱線をせざるをえなかった<sup>12)</sup>。

社会小説に役立てられた題材は大部分この二人の作者自身の観察と体験に基づいている。彼らは、ストーリーの芸術的要請に従って修正された体験を描いている。フライタークにあってはおそらくディケンズにおける以上にそうである。なんとなればフライタークにあっては明確かつきわめて芸術的に構築され、かつ首尾一貫して蓋然性の高いストーリーが上位に立っている。このストーリーに従って彼はまたストーリーの担い手を形造るのである<sup>13)</sup>。それに反してディケンズのかなり多くのロマンは体験したものと虚構のごたませであるように見える。このごたませはしばしば結合が緩く、それでいて独創的であり、かつ真実らしく接合している。ストーリーの登場人物は両作家にあってその人物描写の類似性を見せている。ブレスラウの商人モリナリ (Molinari) が『借方と貸方』のシュレーターの雛形であったことを、フライタークはきっぱりと否定している<sup>14)</sup>。しかしながら彼は、例えば『失われた筆跡』の教授がモーリッツ・ハウプト (訳注 Moritz Haupt 1808—1874 古典言語学者、ゲルマニスト、ライプツィヒ、ベルリン両大学のドイツ文学教授) の諸特徴を帯びていることを容認している<sup>15)</sup>。ディケンズには数多くの人物描写の類似性が発見されると云って差支えあるまい。『デイヴィッド・コパーフィールド』(David Copperfield)はなんと云っても一種の自叙伝ではないだろうか! 例えばディケンズの父はミコーバー氏の雛形である。『デイヴィッド・コパーフィールド』中の常軌を逸した、一風変わった人物は、きらめくばかりに戯画化されて、美辞麗句を並べた書簡体の文章を使うことができる<sup>16)</sup>。同じ場所でディケンズは小柄で不具の女性ミス・モーチャーを實在のモデルに非常に忠実に倣って描き出した。ディケンズは彼女をかくまで戯画化したことは甚しい誤りであったという非難の

手紙を受け取った<sup>17)</sup>。

ストーリーの舞台は二人の作家にとって、彼らが親密に馴染んでいた故郷である。イギリスの作家の誰にしても、我々がディケンズの恩恵にあずかったほど、ロンドンの町を親しみあるものにしてはくれなかった。ディケンズはこの都会を「古道具屋が自分の店の雑多ながらくた」を知っているように、詳しく知っていた<sup>18)</sup>。しかしまたイギリスの小都会や村々を彼は、我々読者がこういった場所ですっかりなつかしい気分になるような情緒溢れるやり方で案内してくれる<sup>19)</sup>。フライタークもまたその故郷の描写にとどまり続ける。『借方と貸方』で彼は我々をブレスラウの町に案内し、シュレーター商会でアルプレヒト街の古くて大きなモリナリ風の商館を中庭や通路、部屋と執務室ともども描き出している。盗品隠匿者ピンクス(Pinkus)の居酒屋のある通りは〈Alte Ohle〉街である。フライタークは子供の時代からポーランドの土地と人々についても馴染みがあった<sup>20)</sup>。

『失われた筆跡』でフライタークは彼のライプツィヒ時代の光景を我々の眼前に彷彿とさせてくれる。フライタークはザクセン・コーブルク・ゴータ公エルンスト二世との交友によって、宮廷生活を識った。公と彼は長年の友情により結ばれていた。この公とフライタークとの見事な往復書簡から、フライタークが『失われた筆跡』で描いた宮廷の姿がコーブルクの宮廷を再現したものではないことが判明する。ともかく彼は、上記の宮廷への度重なる訪問で、皇太子や皇太子妃と知り合いになったが、これらの皇族は彼のロマンの登場人物と一致する<sup>21)</sup>。

場所の描写において、ディケンズやフライタークにあっては、心のこもった愛郷心が表現されている。片やイギリス人の肉体と魂をもって、片やドイツ的心情をこめて描くのである。両者はその情緒溢れるかつまた十分に考えぬかれたやり方で、土地と人間に魔法をかけ、自民族の特性に対する理解を目覚めさせることを心得ていた。

#### b) 天性並びに芸術的天分から見た両作家の親近性

フライタークは真の詩人に何を望んだか？「激しくかつ朗らかなる感情、人間に対するよき信頼に満ち、悪しきものと間違っただのものによって決して人生に拗ねることなく、加えて人生と人間の特性についての知識を有する。この人間の特性は豊富な観察によって確実なものにされる。」<sup>22)</sup>

これによってフライタークは自分自身を特徴づけている、そしてそれ以上にディケンズをも特徴づけている。なぜなら二人の詩人は共に朗らかで新鮮な人間であり、また両者とも人間愛に貫かれ、かつ墮落した者、邪悪な者でもその良い面を認めてやることができるからである<sup>23)</sup>。それからまた彼ら二人の過度なまでの親切で、情愛深く、心を温かくするフモールときたらどうであろう！

ディケンズにあってはこのフモールはフライタークより一層重きをなしている。彼のロマンは文字通りフモールで潤っている。フライタークのフモールはおそらくより穏やかで無邪気なところがある一方、ディケンズの典型的にイギリス的フモールは一層混み入っており、よりグロテス

クであり、粗野であり、より戯画化的効果をあげている。この点でフライタークはディケンズをお手本に修業を積んでいる。フモールの取り扱い方がフェルクの研究<sup>24)</sup>の主要部分を形成しているので、私はこの重要な特徴には触れないことにする。

ディケンズもフライタークも肉体的・心理的な生活の最微・最小にいたるまでの並はずれた鋭敏な観察者である。両者とも人間の諸特性の識者である。フライタークは曾つてティークに宛てて、彼のドラマではシェークスピア的輪郭のもつ単純で、大胆かつ大きく反った線を描くことには成功しそもないこと、そうせず彼が登場人物を数多くの細かなタッチ——そうすることは如何んとも避け難い——で以ってやっ一種のアラベスク模様みたいに描いている、と書いている<sup>25)</sup>。

同じことがフライタークとディケンズのロマンにも当てはまる。この二人の作家は細部の叙述に特別な力点を置いている。両者にとって多くの環境描写は質素な小市民生活から成長してきた。小市民の生活の中にフライタークは「ドイツ的本性の人の心を把える力」<sup>26)</sup>を認めている。

小市民の生活への偏愛を通じて、この両作家においては、牧歌的な要素が非常に強烈かつ真正銘な形で形成された。彼らの「日常的なもののもつ驚くほど奇怪な解釈の方法」<sup>27)</sup>と彼らの細部の快適な描出に対する楽しみが造り上げられた。「それ自体不愉快なものですら彼はとても気持ちよく描き出すことを心得ている」とオットー・ルートヴィヒ<sup>28)</sup>はディケンズについて語っている。

ディケンズはフライタークよりもはるかに多く激しい気性を自在にあやつっている。それ故にこのイギリス人のロマンの登場人物は一層生々としており、ときには非常にグロテスクかつエキセントリックな効果をあげている。ディケンズはあるうちとけない個性のもつ特異さ、特殊さを一層力強く取り出している。フライタークの登場人物は独自というよりは典型的に描き出されている<sup>29)</sup>。アントン・ヴォールフェルトは「明白にお手本となるべき少年」であり<sup>30)</sup>、市民的名誉の典型であり、ザヴィーネは擬人化された主婦というものであり、シュレーターは商人道德そのものである。このことをフライタークは次のように述べることで容認している。つまり「後年人々は『借方と貸方』の中の商人を時折私の友人の似姿と見做す榮譽を示した。誇らし気な実直さを例外とすると、彼らには殆ど共通点はない。書物の中のこの商人はこの小説の理念が要求するように、退屈な人間であって、特定の目的のために考案された人間であり、私の友人であった。』<sup>31)</sup>等々。そしてこの要素の中に、何故ディケンズが芸術家としてフライタークよりもはるかに上位にあるかという理由が存在している。何故ならフライタークは作中の人物を物語のストーリーの理念に従って創り出したのであって、そのためにこれら人物は、我々がたとえ現実の人生の数多の痕跡を彼らに見出そうとも、まさしく紋切型、千篇一律な印象を与えるのである。ディケンズにあっては作中人物はしかしながらストーリーの進行に対する顧慮なしに形づくられている。それで一般的に統一性と蓋然性が妨げられることはない。彼の多様な空想力がストーリーと人



物とを同時に生み出し、一方が他方に左右されることがないと仮定できよう。だからこそディケンズの登場人物は異常なまでに生命力に溢れ、独創的だという印象を与えるのである。

小説の技術に関して云うと、フライターク<sup>32)</sup>がディケンズに勝っていることは疑いもなく容認せざるをえない。フライタークはその几帳面に過ぎるほど正確なドラマの技術を小説に移しかえたのである。自叙伝の中で彼はこう言っている。「ストーリーの構成は、題材が芸術的に十分仕上げられた全ての小説にあっては、ドラマの構成と大きな類似性を有している。」<sup>33)</sup>しかしこの点でもフライタークは刺激をディケンズから得たのかも知れない。O・ルートヴィヒは特にディケンズの小説の構成がドラマと類似していることを指摘している。すなわち「彼の小説は物語られたドラマである。情緒の詳細な描出は音楽の挿入楽節みたいである。彼の描写はまことにドラマチックであり、どの章もドラマの一場面である。彼はその上解説を施している。この解説は濃厚なドラマにおけるように対話の形を借りて行なわれている。」<sup>34)</sup>つまりフライタークは、技術について言えば、ウルリヒ (Paul Ulrich) が再三お手本としてあげるスコットを手がかりに自己練磨したばかりでなく<sup>35)</sup>、ディケンズをも手がかりとして練磨している。何故かと言うとフライタークは社会的な小説を書いたとき、彼にとってスコットよりもディケンズの方が親近感があったからである。

## 第二節の注

- 1) Leon Kellner, *Der englische Literatur im Zeitalter der Königin Viktoria*. Leipzig 1909. S. 40.  
「人々は彼のロマンから、個々の章の核心をつかむことができ、また個々の章を独立した、完成した草案として発行することができる。」
- 2) Freytags "Erinnerungen" (回想録) S. 176. (以下 *Erinnerungen* と記す。)
- 3) 例えば "Nicholas Nickleby" 中の Zierson 卿や Sir Mulberry Falk のごとき人物を参照せよ。
- 4) Louis Cazamian, *Le roman social en Angleterre* (イギリスの社会小説) (以下 *Cazamian* と記す)
- 5) Paul Ulrich, *Gustav Freytags Romantechnik*. (G.フライタークの小説技術) Nr. 3. der Beiträge zur deutschen Literaturwissenschaft. hrsg. v. Ernst Elster. Marburg 1907. (以下 Ulrich と記す)
- 6) *Erinnerungen* S. 136. および Otto Mayrhofer, *Gustav Freytag und das Junge Deutschland*. (フライタークと青年ドイツ派) S. 49 ff Nr. 1. der Beiträge zur deutschen Literaturwissenschaft. hrsg v. E. Elster. Marburg 1907. (以下 Mayrhofer と記す)
- 7) ディケンズは『オリヴァー・トウィスト』の中で救貧院や貧民学校での取り扱いをやっつけ、『ニコラス・ニクルビー』と『デイヴィッド・コパーフィールド』ではイギリス中に私立学校のひどい軽視をはっきりと理解させ、『荒涼館』ではイギリスの裁判手続を嘲笑している。さらにディケンズは人間のさまざまな欠点、たとえば『ドンビー親子』では高慢さを、『マーチン・チャズルウィット』では利己心を、『クリスマス・キャロル』では吝をこらしめている。
- 8) Vera Völk, *Charles Dickens' Einfluß auf Gustav Freytags "Soll und Haben"* (フライタークの『借方と貸方』へのチャールズ・ディケンズの影響). 4. Jahresbericht des Salzburger Mädchenlyzeums. Salzburg 1908. (以下 Völk と記す。)
- 9) オットー・ルートヴィヒ Otto Ludwig, *Gesammelte Schriften* (著作集) Bd. 6. S. 65. Leipzig 1891. 「ドイツ人は教えることが好きだ。ドイツ人は長編小説のために行なった研究とその成果を同時に持ち出したいという誘惑に逆うことができない。」

- 10) Soll und Haben (借方と貸方) I. S.133. -Gustav Freytag Gesammelte Werke. 54. Auflage Leipzig 1901. (以下 SH と記す)。Völk S.5 参照。
- 11) SH. I. S.46 ff. Völk S.5.
- 12) Käthe Friedemann, Die Rolle des Erzählers in der Epik (叙事文学における物語手の役割) (Untersuchungen zur neueren Sprach-und Literaturgeschichte. hrsg v. Oskar F. Walzel. Neue Folge VII. H.) Leipzig 1910. (以下 Friedemann と記す) S.208.
- 13) 下記参照。
- 14) Erinnerungen S.118.
- 15) ebd. S.200.
- 16) John Forster-Althaus, Charles Dickens' Leben. (チャールズ・ディケンズの生涯) Übersetzt von Friedrich Althaus. Berlin 1873/75. (以下 Forster-Althaus と記す)
- 17) Forster-Althaus, a. a. O. III. S.2 f.
- 18) Mielke, S.117.
- 19) Gesammelte Aufsätze. II. S.243 f.
- 20) Erinnerungen S.47 ff. S.182 f.
- 21) Freytag und Salomon Hirzel. Als Handschrift für Freunde gedruckt. Leipzig. 1910. S.149.
- 22) Gesammelte Werke. XVI. S.218 und II. S.242. ここでフライタークは「何よりも朗らかな心を所有すべき、真の詩人」について語っている。「この朗らかな心はその暖かい感情の充溢から発して喜びを他人に伝える」
- 23) Leon Kellner, S.36. 「どんな人間にも何かしら良いところがまどろんでおり、またそれを目覚めさせるためにはめぐまれた状況を必要とするものである、という考えがディケンズの全作品をつらぬいている。彼は比肩すべき者がいないほど、きわめて憎悪すべき表情のかけに、人間性の一片、かくされた魂を見つけ出す魔法を所有していた。
- 24) V. Völk はその前もってよく考えぬかれた、洗練された全ての論文の中で、次のことを確証している。ディケンズとフライタークは社会小説を書いたということ。そしてまた彼女は言葉少なに、『デイヴィッド・コパーフィールド』と『借方と貸方』を比較している。次に彼女はその関心を文体の特性に向け、突きこんだやり方で、この二人の作家のフモールにおける類似性をのべている。ディケンズもフライタークも類似のおどけた、比較、誇張、書きかえ、語呂合せ、撞着語法の使用と対照法を用いて、明朗な効果を狙っている。そうすることで彼ら二人は客観的な報告についての即物的なもしくは事前に設定された主観的見解を表明したり、その登場人物に対して熟慮された好意を述べようとする。結局この両作家は異常な事態から来る可笑しさ、嘲笑と諷刺に論者はふれるのである。
- 25) Paul Ulrich. S.6.
- 26) Gustav Freytag und Heinrich von Treitschke im Briefwechsel. Leipzig 1900.
- 27) Wilhelm Divelius, Englische Romankunst. (イギリスのロマン芸術) 2 Bde. Palaestra XCII und XCVIII. Berlin 1910. (以下 W. Divelius と記す) II. S.438. 同じ場所におけるディケンズの多面的な感受能力の適切な性格描写を参照。
- 28) Otto Ludwig, Gesammelte Schriften Bd. VI. S.66.
- 29) しかし彼の文学は、人の知るごとく、空想力、感情のきわめがたい深み、情熱の完全にデモーニッシュな力において過剰である。(Alfred Dove, Briefw. Freytag-Treitschke, S. VII.) ディケンズと較べての話であるが!
- 30) V. Völk, S.6. nach R. M. Meyer.
- 31) Erinnerungen, S.18.
- 32) 「一人の詩人が厳しい陶冶によってその才能からもっと多くのものを創り出したことはなかった。いかなる他の詩人もつねにその手段を抑えたことはなかったし、自己の目的をかくも意識していたことは

なかった。」(A. Dove. a. a. O. S. VII.)

33) Erinnerungen. S. 179.

34) O. Ludwig Gesammelte Schriften Bd. VI. S. 66.

35) Ulrich, S. 4. 35 ff., 50 f., 68. 119.

### 第三節 フライタークの英語の知識、彼のディケンズ研究時代

外国語とりわけ現代語を習得しようという刺激を、フライタークは彼の叔父から与えられたと言えるであろうか。ギムナジウムの生徒として彼はエールス(訳注. Öls. ニーダーザクセンの郡庁所在地)の叔父の許に住んでいた<sup>1)</sup>。しかしまだ若いグスタフは控え目でひっそり暮らしていたこの若い独身者と接触することができなかった。フライタークは後になってそのことを後悔した。何故なら、叔父は並はずれた語学の才能を有しており、余暇には文学、大部分は外国文学の研究に没頭していたからである。その蔵書もグスタフには役に立たなかった。というのはこの叔父は——フライタークが上述の個所で物語っているように——翻訳など厭っていたからである。フライタークはつまり、当時外国語にはまだ通曉していなかったのだ。

ギムナジウムで彼はフランス語を学んだが<sup>2)</sup> 英語は学ばなかった。そういう訳で彼はいずれにしろ彼が当時すでに熱中していたクーパー (James Fenimore Cooper) やスコットを翻訳を通じて読んだのである。

フライタークが大学で英語をやったのか、それとも、その後いつ英語をやったのか我々はどこにもそれを聞き知ることができない。いずれにしろ彼は英語を徹底的にマスターしたのではなかった。というのは1865年ヒルツェル書店が彼に『タイムズ紙』のあるナンバーを送ったとき、一そこで『失われた筆跡』が論評されていた——フライタークは次のような返事を書き送った。「『タイムズ紙』を読むのは、私にはひどく骨が折れました。私は辞書を手許に所有しておりません。ライプツィヒに行ったら、クローブ (Crowe) が翻訳してくれることになっています」と。

ブレスラウでの最初の楽しい学期が終わった後フライタークは1836年秋ベルリンに移った。ここで彼は初めてディケンズに没頭した。そのことを我々は彼の『回想録』から直接的に知ることができる<sup>3)</sup>。彼は友人と共にベルリンで企てた休暇旅行について物語っている。こうして彼はヴォルループ (Wollup) に地主のコッペ (訳注. Johann Gottlieb Koppe 1872—1863. 農業経営者 1827~1830年までヴォルループの国有地を管理経営) を訪ねた。その息子たちと彼は親交があった。フライタークは我々にヴォルループへの初めての到着<sup>4)</sup> について、どんな風にして若い人達がそこに入っていったか、父親から挨拶をうけたか、歓迎の乾杯をうけたか、この家の娘たちと一緒に庭園を散策したか、を語ってくれる。「好意的な接近を伝達する、善き霊が我々の周囲をいそがしく駆けめぐっている。そしてこの霊がピクウィック (Pickwick) 氏である。』<sup>5)</sup> 若い人々は、自分達がディケンズの世界を動き廻っているのに気づく。大学生達はご婦人方からいたづら

っぽくピクウィック氏のお供と比較される。類似性が探し求められたが無駄であった。「我々はサム・ウェラー (Sam Weller) を全ての雇人の頂点と見做したこと以外に別な類似点を有してはいない。」<sup>8)</sup> この言葉から我々は『ピクウィック遺文集』がどれほどの流布をみていたか、またフライタークと読書する教養階級の人々一般がこのイギリス作家にどれほど精通していたかを見てとることができる。ディケンズは当時本当に盛んに読まれ、『グレンツボータン』に載ったフライタークのディケンズの影響についての論評<sup>9)</sup>はこの『回想録』所載のささやかなエピソードから確認することができる。『先祖代々』の中でもフライタークはディケンズが当時享けた大変な人気<sup>10)</sup>について語っている。

後になって何時フライタークがディケンズに取り組んだか、直接に確めることはできない。『デイヴィッド・コパーフィールド』、『ニコラス・ニクルビー』と『オリヴァー・トウィスト』等の諸作品をフライタークはいずれにしろ『借方と貸方』起草前か起草時に読んでいた。このことは後で行なうこれら諸小説の比較が我々に証明してくれる。この想定は、コーブルク大公妃宛ての一通の書簡(1856年2月6日付)の次の本文中のフライタークの短い所見によって裏付けられる。「大公の命令にもとづき私は、同封されたディケンズの諸作品、『ニコラス・ニクルビー』を謹呈するまでに、新年最初の数週間を待ちとおした。このすぐれた人物の初期の小説が大公殿下に彼の『コパーフィールド』に劣らず好しい印象を与えてほしいものである。」<sup>11)</sup>このことから、フライタークがこの二つのロマンを遅くとも1855年にはすでに読んでいたということ、もしくはそれより早い時期すでに読んでいたということは可能性の高いことと思われる。『デイヴィッド・コパーフィールド』は12部に分れて1849—1850年に出版された。フライタークはこれを翻訳で読んでいる<sup>12)</sup>。原文の出版と翻訳の出版の間には一定の期間が過ぎ去っている。かつまたフライタークがこの翻訳出版の直後にこの作品を入手したということは確認することはできない。彼はつまりこの翻訳作品に1850年以後か、もしくは『借方と貸方』の起草時に取り組んでいる。『借方と貸方』を彼は細部の手直しを除いてすでに1854年12月には完成している<sup>13)</sup>。これまでに名前を挙げたロマン(『ピクウィック遺文集』、『オリヴァー・トウィスト』、『ニコラス・ニクルビー』、『デイヴィッド・コパーフィールド』)の他にフライタークはいずれにしても更に『マーチン・チャズルウィット』を知っていた。このことはこれまでしばしば引用した『グレンツボータン』掲載論文から推定することができる<sup>14)</sup>。フライタークは大公妃宛ての手紙の中で『Nikolas Nickleby—本来は Nicholas』と綴っている。この綴り方はフライタークが大公妃にドイツ語訳を観覧に供したことを示している。しかしまた彼自身はディケンズの諸小説を原典では読んではいなかったであろう。すでに彼の欠陥だらけの英語が原典を読むことに支障をきたしたのである。何故かという、ディケンズはイギリス人にとっても決して易しい読み物ではなかったからである。さらにフライタークは『ニコラス・ニクルビー』中の大いに共鳴できる人物、〈チアリブル〉兄妹を二度名差している<sup>15)</sup>。彼はそれを翻訳文から引用している。というのは原典ではこの兄妹は

〈Cheeryble〉であるが、これを〈Wohlgemüth〉としているからだ。ディケンズ及びその他のイギリス作家の著名な翻訳家であったユーリウス・ザイプト (Julius Seybt) のこの小説の翻訳では奇妙なことに全てのイギリス人の苗字がそのままの形でとどめられているが、〈Cheeryble〉のみが〈Wohlgemüth〉と訳されている。いずれにしてもこの名前をもつ二人の愛すべき人物をまさしくこの名前によって特徴づけるためであった<sup>16)</sup>。フライタークもまたこの一例を除いて、ディケンズの長編小説の英語名を常に使用していたので、彼が『ニコラス・ニクルビー』をザイプトの翻訳で読んでいたということはいかにもありそうなことである。おそらく彼はまた他の長編小説をザイプトの翻訳で読んでいたという可能性は、彼がザイプトを個人的によく知っていただけに益々高い。何故ならザイプトは『グレンツポータン』の協力者でもあったからだ。フライタークは『回想録』<sup>17)</sup>の中で、1848年の革命の或る夜彼がザイプトと落ち合ったこと、二人が一軒の旅館に赴き、上等な飲物と、マコーリー (Thomas Babington Macaulay) についての「燃えるように激しい談話」のおかげで、バリケード戦争その他もっとも肝心な心配事をすぐに忘れてしまったことを、物語ってくれる。同じ場所でフライタークは、ザイプトの訳業一般について批評をしている<sup>18)</sup>。それによって彼がこの翻訳を知っていたことが想定できる。

ところでザイプトは『グレンツポータン』のイギリス文学特にディケンズに熱狂していた唯一人の同僚ではなかった。『グレンツポータン』の永年にわたる共同編集者でかつフライタークの友人であったユリアン・シュミット (Julian Schmidt) はディケンズの作品を度々かつ愛情をこめて読んでいた。フライタークはユリアン・シュミットについて『回想録』の中でこう語っている。「とりわけ彼の心をとらえたのは、登場人物の独創的なスケッチであり、次いで描写の言葉の優美さであった。イギリスの詩人達の描写方法はまったく彼にはびったりで、ディケンズの素晴らしい調子と魅力を当時のイギリス人のように彼は完全にうけとめていた。」<sup>19)</sup>ディケンズに関する一論文がシュミットの手で書かれている<sup>20)</sup>。その出版は多分フライタークがディケンズの作品に没頭していたのと同じ時期に当たる<sup>21)</sup>。フライタークのその他の同僚、友人であるヤーコプ・カウフマン (Jakob Kaufmann)——彼も長期にわたり『グレンツポータン』を編集していた——はイギリス的な知的教養の熱心な崇拜者であった。彼は偉大な言語才能の持主で<sup>22)</sup>おまけにディケンズの翻訳に仲間入りしていた<sup>23)</sup>。このように、フライタークが文字通りディケンズ崇拜者の圏内に居り、また彼がこのような方法で外部からもくりかえしこの偉大なイギリスの小説家に注意を向けさせられていたことが分る。

フライタークがディケンズを翻訳で読んだという主張は、更に、フライタークがディケンズの長編の翻訳書を勿論1875年になってからヒルツェル書店に注文した、ということを持ちどころにしている<sup>24)</sup>。いずれにしる、フライタークが若い時に原典を、後になってその翻訳を読んだということを想定することは殆どできない。この同じ書店でフライタークは1869年ウルリーツィーシュミット (訳注: Hermann Ulrici と Julian Schmidt か、後者について確認ができない) の

シェークスピアの翻訳を、1889年にはスコット (Walter Scott) の若干の長編小説の翻訳を注文している。

### 第三節の注

- 1) Erinnerungen S. 68 ff.
- 2) フライタークのギムナジウム卒業試験合格証明書。Lindau で複写, S. 361 f.
- 3) Erinnerungen S. 73.
- 4) Briefwechsel Freytag-Hirzel, S. 150.
- 5) Erinnerungen S. 96 f.
- 6) 我々はそこで『失われた筆跡』のビールシュタイン城での二人の学者の応接のことをありありと想い出させられる。I. 50 ff.
- 7) Erinnerungen S. 90.
- 8) ebd. S. 91.
- 9) ebd. S. 2 ff.
- 10) Bd. 6. <Aus einer kleinen Stadt> (ある小さな町から) S. 359. 「そして彼ヴィクターは少々悪意をこめて、彼女に向かって、彼女が一番ひいきにしていた詩人のことを訊ねた。しかしこの質問は二人の婦人に、シャンペンの壘二本で針金や細紐を切断するのと同じ効果を及した。二人の口からディケンズという名前が同時にひびき出た。そして賛辞と喜び、笑い声と感動の言葉がつきることなくほとぼしり出た。今やヴィクターは同一の詩人を高く尊敬したので、彼は勇敢にも感情の吐露に参加して、三人は市場の騒音を忘れ、太陽がすっかり沈んでしまうまで感激しどうしであった。…」
- 11) Briefwechsel. Freytag-Coburg, S. 355.
- 12) 下記参照。
- 13) Briefwechsel Freytag-Hirzel, S. 16.
- 14) Gesammelte Aufsätze II. S. 4243.
- 15) Erinnerungen S. 119 und Gesammelte Aufsätze II. 243.
- 16) 下記参照。
- 17) Erinnerungen S. 160.
- 18) 彼フライタークはこの箇所でこう言っている。「ザイプトは有能な、また時には迅速な作家であった。タベ酒盃に向かうときのように、朝には素早くかつ規則正しく仕事に向かった。彼は英語の翻訳を速記者に口述筆記させる習慣があって、こういう方法で数週間のうちに一編の膨大な小説を片づけることができた。こういうやり方では翻訳としては、遺憾な点が多々あったが、その翻訳は依然として同類の沢山の仕事よりも立派であった。」フライタークのこの判断が真実であることが確認されている。ザイプトの翻訳はこのイギリス詩人の最良の翻訳書に属する。ザイプトはモリアーティー (E. A. Moriarty) 及びロバーツ (H. Roberts) らと一緒に1840年代の初めから、1864年までディケンズ全集の翻訳に従事した。出版はライプツィヒのローク (Lork) 書店である。個々の作品の翻訳出版は『炉辺のこうろぎ』がライプツィヒ、1846年、『イタリア旅行記』ライプツィヒ、1846年、『デイヴィッド・コパーフィールド』ライプツィヒ、1850年。多分ディケンズの名前をドイツに最初に紹介した上述のロバーツの翻訳はより不正確で、かつ原作のもつ味を伝える点で劣るが、『ピクウィック遺文録』ライプツィヒ、1839/38年。『ロンドンスケッチ集』1838年。『オリヴァートゥイスト』1838/39年、『ニコラス・ニクルビー』1838/39年がある。これらよりもはるかに広く普及し、高く評価されたのはモリアーティーの翻訳である。つまり『バーナビー・ラッジ』ライプツィヒ、1841年、『マーチン・チャズルウィット』ライプツィヒ、1843/44年、『クリスマス・キャロル』1844年、『大晦日の鐘』1845年、等である。フライタークが読むことのできたその他の著名な翻訳作品について名前をあげてみると、コルフ (C. Kolf) の『ディケンズ全集』シュトゥットガルト、1841—46年、55/56年。ディーツマン (A. Diezmann) の『ディケンズ、ユーモラスな風俗画』ブラウンシュヴァイク、1838/39年、『オリヴァー・トゥイスト』1838/1839

年とチャルノフスキー (O. V. Czarnowski), 『ディケンズ全集』1840/43年, である。私のこの論文では常にザイプトとヴェーゲ (J. Wege) の翻訳にもとづいて引用している。(上記文献書目を参照のこと)

- 19) *Erinnerungen* S. 163.
- 20) Julian Schmidt, "Charles Dickens" Eine Charakteristik. Leipzig 1852.
- 21) 上記参照。S. 17.
- 22) *Erinnerungen* 中のカウフマンの感情こまやかな性格描写。S. 154.
- 23) P. Lindau, S. 143.
- 24) Ulrich, S. 129 著者は追加事項として, フライタークが1854年からヒルツェル書店に注文した書物の目録を示している。

## 第二章 ディケンズの小説と『借方と貸方』の素材の比較

フライタークへのディケンズの影響を跡づけるために, 私はディケンズの若干の小説と『借方と貸方』の比較を行なう。フライタークの創作に影響を与えた『オリヴァー・トゥイスト』, 『デイヴィッド・コパーフィールド』及び『ニコラス・ニクルビー』が考慮されることになる。『失われた筆跡』にはディケンズの影響はほんの僅かしか認められない。いずれにしても決定的ではあるが, 無意識的なフライタークのディケンズ模倣は登場人物と個々のストーリーの展開に見出される。つまり私は類似の登場人物を相互に対照させ, 彼らの資格好, 全体, 性格, 生活と活動と彼らの登場するエピソードを比較してみる。また私はストーリーのその時々舞台の批評を, 個々の出来事, また登場人物の性格描写に結びつけてみる。

『借方と貸方』の登場人物のお手本となった『デイヴィッド・コパーフィールド』, 『ニコラス・ニクルビー』と『オリヴァー・トゥイスト』

### 第一節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のスティアフォースと『借方と貸方』のフィンク

フライタークはその『回想録』で, 彼が凡そ10歳の時処女小説, 一種のロビンソン・クルーソー風物語を書いた<sup>1)</sup>と語っている。この物語ではジャックなる名前のお気に入りの人物が成長していく。ジャックは「常に最善のものを見つけ出し, あらゆることを克服し, 常に上機嫌である。」このジャックはお行儀の悪い少年達の先祖であり, クンツとかボルツとかフィンクとかいう名前になって彼の書き物机のまわりを跳ねまわっていた」という考えにフライタークはなりかかっていた。こういう考えをフライタークが口外するずっと以前にローベルト・プルッツ (Robert Prutz) はその『現代のドイツ文学』で次のように書いていた。「この小説『借方と貸方』の本当の主人公フォン・フィンクは手代達の恐怖の対象であり, 並はずれて機知に富み, 騎

的で、拍車をはいたフォン・フィンク氏どこから見ても堅固となったザールフェルト（訳注、Saarfeld. ドラマ『Die Valentine』1847の登場人物）、ヴァルデマール（訳注、ドラマ『Graf Waldemar』1858年の主人公）的放蕩さを有しないヴァルデマールの人物。帳場のデスクに座って新聞記事の代りに元帳と日記帳に書き入れをしているボルツ（訳注、Conrad Bolz. 喜劇『新聞記者』に登場する『ユニオン紙』の編集長）のような人物<sup>2)</sup>。このようにプルッツもやはりフィンクの性格描写においてこの詩人の以前の作品の登場人物に依拠したが、しかしその上フライタークの言葉には左右されなかった。フィンクのようなタイプの間は、ロビンソン・クルーソー的なものに始まり『借方と貸方』に至るフライタークの若干の作品の中に繰り返し登場してくる。フライタークはこの人物に特別な満足感をいただいていた。プルッツは続けて更に次のように述べているが、それは完全に正しい<sup>3)</sup>。つまりアントンはこの小説の名目上の主人公である。それに対してフィンクは内面的な中心点である。アントンは「義務の虚弱な子であるにすぎぬが、フィンクはこの詩人に愛情をこめて創り出された、本当の息子である。」<sup>4)</sup> フィンクは作者の本性に近い、本当の可愛い子である。とりわけフィンクはその精神的な父からいたづらっぽい素質を受け継いでいる。このことから、『デイヴィッド・コパーフィールド』でフライタークの作品におけるフィンク・タイプの役割を演じているステアフォースはこのドイツ作家に大きな印象を残し、『借方と貸方』のフィンクの形成に重要な影響を及ぼした、ということは容易に理解できる。この影響を跡付けることが今や試みられなくてはならない。

ディケンズの小説で幼ないデイヴィー（Davy）は彼の継父に虐待されている。彼は母や保護者から無理に離れなくてはならず、寄宿舎に連れていかれる。そこで彼は病気になり校長から折檻される。要するに彼はまことに惨めな状態に置かれているのだ。そこでステアフォースが登場する<sup>5)</sup>。この学寮の最年長の生徒としてステアフォースは抜きん出た位置を占めている。校長のクリークル（Creakle）氏が思いきってステアフォースには手を掛けないという話を聞くのはデイヴィーにとっては一つの驚きであった。ステアフォースはデイヴィッド（デイヴィーのこと）に深い印象を与えた。少し年上の仲間がフサグリ酒や菓子を買うために彼に金を要求したとき、デイヴィッドは敢えて反対しなかった。逆に彼はステアフォースの要求を当然のことと思った。美しい顔付きをしたこの若い人間、捲毛で、わざとらしいところのない、良い声をした人間がこの「新入り少年」に及ぼした威力はかくも強烈であった。

『借方と貸方』ではアントンにも同じ状態が起る<sup>6)</sup>。

商家の勝手が未だ分らずに、到着最初の晩アントンが仲間のところにと就任挨拶の訪問をしようと思っていたとき、そしてまさにはじめてノックをしようとしたとき、その部屋の住人が彼の方に歩み寄ってきた。スラリとした、感じのよい物腰のハンサムな男である。「あなたはもうあなたの仔馬の手綱として引っぱって行かれるのですか？」と彼はアントンの支配人に向かって言った。紹介をすませた後彼は先ず「貴族流儀」で10ターラーを自分の勘定払いにするのだが、その



金はアントンの道連れのプチブル的に正直な店員からひったくり、「ぞんざいなやり方でチョコキのポケットに突込んだ」ものだ。彼は馬を買う積りなので、家に居なかったことを残念に思った。儀式張った訪問を彼はもう済ませたものと思い、アントンの門出に祝福を与え、拍車をきませながら遠ざかっていく。アントンはおどおどして後に残っていた。数日後フィンクに再び会う。フィンクはこの商館が気に入ったかと訊ねる<sup>7)</sup>。アントンが新しい生活を賞賛し、彼の立派な意図を述べるとき、アントンはその俗物根性故にフィンクから嘲笑される。

スティアフォースにもフィンクにも我々つまり同一の自惚れの強い性格の持主を発見する。しかしこの性格はデイヴィッドとアントンには異なった結果をもたらす。年のいかない新入りの少年は彼の保護者の堂々とした人物の全てを我慢している。成人した、駆け出しの商人にあってはしかしながらフィンクの高慢な態度に敵愾心が呼びさまされる。フィンクが度をすごした、横柄で軽薄な調子でアントンを侮辱すると、アントンは即座にきっぱりと対処し、フィンクに挑戦するのである<sup>8)</sup>。フィンクは前言を撤回し、誠実に罪の贖いをする。ここでフライタークはそのお気に入りの主人公のもっとも良い面を見せるのである。主人公の良い側面、とりわけ卒直さと高潔な心情とが見事に褒めそやされる。『借方と貸方』中のこういった場面、そのお手本を『デイヴィッド・コパーフィールド』中に見出すことができる。学校で大いに尊敬される生徒のスティアフォースは代用教員のメル(Mell)氏を侮辱する<sup>9)</sup>。メル氏はこの生徒に訓戒するが、そのことはクリーク校長の許でのすでに非常に不安定な彼の地位にも関ることである。スティアフォースは自分の非を認識していて、できるかぎりそれを改めようと努力する。

『借方と貸方』及び『デイヴィッド・コパーフィールド』の場面を比較してみると、この双方の侮辱する者の行動に大きな類似点のあるのが分る。そこには自惚れ、横柄、思いやりのなさが存在する。しかしそれでいて実行された不正にも拘らず、気品と一種まともなところが存在する。二人の作家は、こういった点でまったく同じように、侮辱を加えた人間に好都合な気分読者をさせることを心得ている。それとも読者はこの二人の若者の外面的行動の描写——そこには内面の高い志操が反映している——によってともかくまるめこまれるのであろうか？ 無給見習で、富裕な跡継ぎ息子であるフィンクが商館で声望ある地位を享受しているように、そのお手本のスティアフォースも学校で同じ地位を享受している<sup>10)</sup>。他の生徒達が皆で一緒に食事をしている間に、スティアフォースはクリーク氏の家族の集いに加わって食事を取っている。クリーク氏の住居に彼は自由に入出入りができるのだ。日曜日に彼はクリーク嬢を教会に案内して行き、デイヴィッドの方はご婦人の日傘を騎士気取りで手にかかえた優雅な友人の方を憧憬の目差しで見つめている。ここで我々はアントンの姿を想い浮かべる。アントンは驚嘆と敬虔な畏怖の気持ちでフィンクを見上げている。フィンクはご婦人や商人連の囲むテーブルの上席に座するという特権を享受し、その向う見ずな、気どらぬ流儀で、堅固しい、体面を重んずる市民家族を面白がらせている<sup>11)</sup>。

フィンクもスティアフォースも初っ端から賭に勝ち、人々を夢中にさせる。スティアフォースの親切的な振舞と上品さは確かにうっとりさせるように自然らしく描写されている。フィンクは他人に印象づけようと思うときには、とくに印象を与えている。スティアフォースは憎めない人間だ。デイヴィッドを訪ねて来る実直な漁師達をスティアフォースは如何に狂喜させたことだろうか<sup>12)</sup>。スティアフォースがすでにとくに彼らとの出会いのことを忘れてしまっているのに、彼ら漁師達は今だにまだ彼のことを、まるで彼らのところに出現した奇跡のように語るのである。老ペゴティーはパイプをふかしながら、デイヴィッドに向かってこう言う。「こいつは友人だ。友人なんだ。彼の姿を見ることが楽しみでないなんてそんなことがあってはならない。」<sup>13)</sup>デイヴィッドは「気前がよく、洗練された、高貴な若者である」彼のことを語る。ペゴティーの養女であるエムリー (Emly) はそれを耳を傾けて聞いている。テーブルの上に身をかがめて、彼女は傾聴し、息を殺している。彼女の碧い眼が輝き、彼女の頬が赤味をおびてくる。

同じやり方でフライタークは作品の主人公に効果を出させている。フィンクにも人を眩惑させるところがある。彼の知人達は皆な彼に魅せられている。ヴォールフェールト自身もその一人で、最初の諍いが彼らを友人にしてしまった後そうであった。しかしとりわけ魅了されたのはザヴィーネである。彼女は密かに愛と苦痛に耐えている。彼女が独りきりのときだけ、その思いがどっと現われてくる。「あの乱暴な客人の彼は、花盛りの茂みの上をかすめる旋風のように、私達のところへやってきたのだわ。旋風が吹きつけるところでは花は地面に落ちてしまう。彼の生涯は混沌で、止むことのない大騒ぎである。彼に近づくものを、彼はその気狂いじみた踊りの中に引きこんでしまう。私だってそうだわ、私だってそうよ！ あなたは高慢で、向う見ずな精神の持主だわ。あなたは私の魂まで興奮させたのよ。私は骨を折った。何日も何日も戦ったわ。しかし彼の魔力がくりかえし私を虜にしてしまうの。魔力はまことに美しく、輝しく、稀有なものだわ！」<sup>14)</sup>

フィンクがその家に入り出ていたフォン・バルデレック (Baldereck) 夫人もまた彼の向う見ずで、必ずしも趣味のよいとは言えぬ態度に心を奪われてしまい、彼を娘の婿にと望むのである。この善良な夫人はフィンクの顔付きや話し振りの中に待ち伏せている嘲笑と蔑みに気付かない<sup>15)</sup>。フィンクの訪問が話題になったとき、エーレントール家には大騒動が起る。物静かで、人間嫌いな書齋の人ベルンハルト (Bernhard) さえ急に見違えたように変ってしまった<sup>16)</sup>。フィンクがロートザッテル家の陰気なポーランドの館に急に姿を見せたときですら、この家の雰囲気はすっかり変ってしまった。家族の者はこの富裕な伊達男の訪問によって朗らかな刺激をうける。「彼らの家の中には曾つてのように再び上つて跳ねまわるような調子の会話と一人一人の人間に、誰もが他人の快適さを高めているという感情を与えることができるようなやさしい思いやりが戻ってきたのだ。それはこの家族が馴染んでいた昔ながらのしきたりであった。」<sup>17)</sup>スティアフォースはデイヴィッドと、まるでフィンクとアントンのように、交き合うのである。交き合いは大い

に友好的なものである。全ゆる点で優越者であるスティアフォースとフィンクはどんな状況においても自分達の落ち着と平然さをば、より素朴で、よりぎこちない生き方をしている友人達に感得させるのである。彼らの活力に満ちた振舞いはデイヴィッドやアントンの内気で素朴な振舞と鋭く対照的である。デイヴィッドやアントンの振舞いは年配の友人達を密かに楽しませている<sup>19)</sup>。

デイヴィッドはスティアフォースに招待されて、スティアフォース夫人の貴族的な古い家で数日間を過ごす。夫人は自分の息子を甘やかせ、熱愛している<sup>19)</sup>。デイヴィッドは暫しの間友人と一緒に居られるので幸せに感じている。またスティアフォースも「雛菊」——デイヴィッドをそう呼ぶのである——に好意を寄せる。何年もの間ずっとこの両者は互いに音信不通であった。スティアフォースはデイヴィッドに〈騎士の技芸〉の手ほどきをする。騎馬とフェンシングとボクシングを教える<sup>20)</sup>。夜にはこの友人達は心地の良い暖炉の傍らで時を過ごし、昔の思い出話に花を咲かせる。スティアフォースの部屋はまさに絵に画いた快適さである。安楽椅子、刺繍したクッションと足のせ台はデイヴィッドに寛いだ、暖さを印象づける<sup>21)</sup>。

我々はここにアントンがフィンクとすごした気晴の時を想い浮かべる。この二人の間は益々親密の度合を増す。アントンに自分好みのスポーツの手ほどきをするのがフィンクの楽しみであった<sup>22)</sup>。フィンクはアントンに水泳と騎馬とを教える。アントンは銃砲の取り扱い方を学び、またフィンクの指示に従って標的の円盤を射つことをも学ぶ。ついにアントンはフィンクの案内でバルデレック夫人のサークルに紹介される。アントンはダンスを覚え、社交的洗練さを身につける<sup>23)</sup>。しかし一番寛いだ気分させるのはフィンクの部屋ですごした冬の夜のことである。この部屋にはスティアフォースの居間同様暖い雰囲気漂っている。上品な家具が厚い、苔のように柔かいじゅうたんの上に置いてある。心地よげにアントンは大きな安楽椅子の柔らかなクッションに身を沈め、天井に向かって青い煙草の煙りを吹きかける。一方フィンクは紅茶の準備をしている<sup>24)</sup>。

この若い人達の友情は二つの長編小説の中で同一の特性を示している。スティアフォースはデイヴィッドを自分の所有物のように扱うが、彼には心のこもった好意を寄せている。スティアフォースは彼に対してだけこんな風な信頼を寄せている。それに対してデイヴィッドは感動的な忠誠心をもって報いるのである。彼はスティアフォースのためなら火中に飛び込むことも厭わなかったであろう。フィンクとアントンについても事情は全く同じである。アントンがフィンクのもとですごした最初の晩以来、アントンはフィンクによって親切に取り扱われる。この親切は、この見習社員が商会の他の仲間と接するときのぞんざいなとは大いに異質である。「アントンは友人に最大級の忠誠心で報いた。彼は多くの点で尊敬しまた賛嘆することのできる一人の仲間を持つことで幸せだった。自分が腹心として他の大勢の人達に抜きんでいたということはアントンの自尊心にとってかぎりなく心地のよいことだった。そのことでフィンクはおそらく得るところが少なくなかった。初め気紛れにしか思えなかったものが、彼にはたちまち必要となった。」<sup>25)</sup>

同じことはスティアフォースにも当てはまるであろう。学校でのデイヴィッドとの友情は先ず気紛れであった。その気紛れが後に彼の必要となり、遂いには彼は目的のための手段として利用しつくすのである。それに反しフィンクの場合アントンとの友好関係は深まり、アントンは友人の決心と行動に対し徐々に少なからぬ影響力を獲得する。

スティアフォースとフィンクの性格描写にはもう一つの要素が加わる。両者とも癩癪もちで、軽率である。彼らは熟慮せずに行為へと駆り立てられて、後になって後悔する。こうして我々はスティアフォースが、これまでに激怒して彼の母の社交友達ローザ・ダートル (Rosa Dartle) の頭にハンマーを投げつけたことを知る<sup>26)</sup>。そしてその時フィンクがとくと結果を考えもせずに、ザヴィーネの可愛がっていた雀を銃で撃ち殺したことを思い出す<sup>27)</sup>。この二人の若者は君主の人間であり、他人への思い遣りが無い。

デイヴィッドがスティアフォースに水夫達との出合いを思い起させたとき、スティアフォースは「粗野な若者」ミスター・ペゴティーのことをぼんやり想起できるだけである。しかしそれでいてスティアフォースは「こういった種類の人間」達のところでデイヴィッドと一緒にすごすことに悪い気はしていない<sup>28)</sup>。同様にフィンクはエーレントール一家のことを考える。彼のベルンハルトの待遇の仕方は、アントンに対する思い遣りと併せてはじめて人間に相応しいものとなる<sup>29)</sup>。

スティアフォースにとって、自分の友をヤーマスの船乗り達のところへ連れていくのは一種の気分転換である。自分の名声が先行すること、実直な漁夫にとって自分が非常に大事な人物であるということは、彼を嬉しがらせるのだ<sup>30)</sup>。この二人は先ずデイヴィッドの年老いた女保護者ミセス・バーキス (Barkis)、つまり旧姓ペゴティーのところへやってくる。我々はスティアフォースが人々に与える印象を判断するために、ディケンズ自身の話に耳を傾けよう。「彼の巧まない、活気があって、機嫌のよい天才肌のところ、ハンサムな容貌、また気に入れば全てのことに順応し、また彼にとっていくらかでも大事なことなら、すぐさま全ての人々の関心の的になるという彼のもって生まれた才能がものの5分と経たぬうちにミセス・バーキスをすっかり虜にしてしまった。……彼は私と共に昼食のためにそこに留まっていた。もし私がすすんで述べようとしても、彼がどんなに乗り気になりかつ陽気に昼食を共にしたかを決して表現できないであろう。彼はミスタ・バーキスの部屋に光が風のようにあたりを明るく、さわやかにしながら入っていった。彼はまるで晴天のようであった。彼の行動には騒音も立たず、努力のあとも、あるいはわざとらしさもなかった。しかし彼のする全てのことに筆舌に尽し難いほど無造作なところ、何か他のことをしたり、それをもっと旨くやることは見たところ不可能と思わせるところがあった。そうといったことはまことに優美で、まことに自然でかつまた好ましいものだったから、思い出の中で今なお私を圧倒しそうになる。」<sup>31)</sup>

やがてスティアフォースとデイヴィッドとは古いボート小屋を探し出す。そこにミスタ・ペゴ

ティー一家が夕べの灯を囲んで座っている<sup>32)</sup>。大きな喜びが驚きの感情にまさってあたりを支配し、まもなく愉快的談笑が船乗り達と客人を一つにする。全員がスティアフォースの影響で夢中になるが、特にエムリーがそうだ。最初恥しがって彼女はその場を逃げ出す。しかし連れ戻されてきて、しばらくしてスティアフォースが彼女と穏やかに、尊敬の念をこめて話すのに気付くと、彼女は恥らいを克服する。スティアフォースはすぐに漁師達の思考の世界に慣れることができる。彼は帆走やオール漕ぎについて、船や魚釣りについて物語り、居心地のよいボート小屋への恍惚感を表明する。彼は軽妙に、わざとらしさぬきにお喋りをし、聞き手を自分の魔法の世界の虜にしてしまう。エムリーは傾聴し、その目は彼の口許に吸いつけられている。彼女自身は殆ど語らない。しかし彼がその冒険を物語ると彼女の銀のように澄んだ笑い声が部屋の中に響く。遅い時刻になってスティアフォースはミスタ・ペゴティーを唆かして昔の突撃の歌をわめかせ、自分でも船乗りの歌を表情豊かに美声で歌ってみせる。こうして彼は唯一つつまりエムリーの賞賛を得るために全ゆる演戲をやっている。彼の興奮は次第に強まり、獲得欲は嵩じていく。彼は単に気分を掻き立てようとするにとどまらない。彼はこの美しい、無垢な少女を手に入れるために夢中になっている。優越者を演じ、彼を喜ばせる全てのものを自分のものにしたという暢気な習癖が彼を情熱にまで駆り立てていく。エムリーが「間抜けな奴」ハム(Ham)と婚約しているかどうかなど、度外れたエゴイズムにとりつかれて彼は意に介しない。彼には限度がなく、顧慮することがない。こうして彼は自分の目的を達するのである。

海岸で何日かが過ぎ去っていく。友人達はちょいちょいこの生活を別々に送っている<sup>33)</sup>。デイヴィッドは自分の昔の故郷と旧知の人々を訪問する。スティアフォースは海に出て、漁師達と痛飲し、倦むことなくエムリーに求婚する。誘惑のプランは熟してくる。デイヴィッドや他の人々は全然それに気付かないし、予想もしていない。

エムリーは極めて酷い非難に苦しんでいる。しかし彼女は良心の声に従うことができない<sup>34)</sup>。彼女は誘惑者に抵抗することができない。スティアフォースの良心すらもぐらついてくる。「私は心の底から、運命にもっと巧く導かれていればよかったのに、と望んだ。私は心をこめて、自己をもっと巧く操縦することができればと望んだ。」<sup>35)</sup>と彼は或る時デイヴィッドに向かって言った。デイヴィッドはスティアフォースの意気消沈した気分を理解することができない。しかし間もなく立ち直り、彼の陽気と機知とがしばしば無理強いめいてひびこうと、いつもどおりに朗らかで愉快になる。デイヴィッドが再びロンドンに滞在している間、スティアフォースは、最後の準備にとりかかるために、ヤーマス(Yarmouth)に何度も滞在する。そして或る晩のこと、エムリーが出ていってしまったこと、スティアフォースと一緒に立ち去ってしまったという悲報を携えてハムがやって来る<sup>36)</sup>。

この巨匠の腕をもって描き出されたエピソードはフライタークに強烈な印象を残したと言えるであろう。今度は我々は『借方と貸方』におけるその影響の痕をたどってみよう。

フィンクはアントンによってエーレンタール家に紹介されて<sup>37)</sup>、先ずこのユダヤ商人の息子、つまりアントンと交友関係にある、理想主義者で物静かな書物相手の学者と知り合う。しかしフィンクにとってこのベルンハルト・エーレンタールなどまったくもってどうでもよい存在である。フィンクは唯、この家の美人の娘と知り合いになることだけを期待している。まさしくそれ故にこそ彼は「博愛主義的気分」に浸っており、軽快で好意的な彼の流儀でもって、喜びの余りすっかり興奮していたベルンハルトと談笑し合っている。ベルンハルトへのこの紹介は一種の前奏曲をなして、我々はスティアフォースとデイヴィッドのパーキス嬢訪問と比較することができる。両作品において若い二人の友人が彼らと接触する各々の人間に及ぼす印象の描写によって、我々はやがてやってくる事態に対処する心構えをさせられる。続いて感情の高まりがやってくる。つまりスティアフォースとデイヴィッドはその晩をペゴティー家の人々と過ごす。フィンクは夕食のときにエーレンタール家の他の人々と知り合うことになる<sup>38)</sup>。男性達は彼にとってはこの時から空気のように無視された存在となり、フィンクが没頭するのはロザリーエと彼女の母だけである。この二人の女性に向かってフィンクは「ひどく投げ遣りな調子で、お世辞たらたらと喋りまくるので、彼女たちは魅了されてしまう」のだ。彼は話術の巨匠であって、スティアフォース同様、自分の目標を手に入れるため最大の努力を払うのである。というのはスティアフォースがエムリーを自分のために手に入れたように、フィンクは若くて美しいユダヤ女性の心をとらえてしまう。彼は居城について、音楽や競馬について語り、こういう機会におきまりの、談笑の材料の全てを早口で喋りまくる。彼は上流社会の弱点を諷刺し、それによってロザリーエとその母をうっとりさせさせる。彼女達はこういった領域に立ち入ることは禁じられている。食後フィンクはロザリーエがグランド・ピアノを弾いてくれるようせがむ。ついには彼自身が鍵盤をたたき、荒々しいスペインの歌をうたう。このように我々はこのイギリス小説との対比を細部にわたって行なうことができる。

フィンクとアントンが立ち去っていった時、エーレンタール家の全員がこの「上流社会」に所属する男性、呑気で気の利いた話し上手な男にすっかり心を奪われてしまっている。

フィンクは無駄骨を折った訳ではなかった。というのはアントンが、フィンクの頭巾つき外套に身をくるんで、ある日エーレンタール家に足を踏み入れた時、覆面したロザリーエが彼をマントの所有者と思い、やさしく彼を迎え入れてくれるというショッキングな事件が起るからである<sup>39)</sup>。今や勿論この事件はイギリス小説よりはるかに当り障りなく進展する。アントンはフィンクの恥ずべき行動を非難し、フィンクがロザリーエかもしくは自分自身と関係を断つべし、と決断をせまる<sup>40)</sup>。

その上アントンは、そんなこととは露知らぬベルンハルト、人を騙すことなど許されないベルンハルトに告げ口をする、と言ってフィンクを脅すのである。このようにして、ロザリーエに対する好意は確かに表面的なものでしかなかったフィンク——彼は「興味深き民衆心理の研究」と

いうことを口走っているのだが——<sup>41)</sup>は友人に譲歩することを決心し、このユダヤ人女性に別れの手紙と送る。

『デイヴィッド・コパーフィールド』ではスティアフォースとエムリーは長い期間小説の中から姿を消してしまっている。終章においてやっと彼らは再び姿を現わす。フライタークは同様、ロザリーエとの関係を解消した後フィンクをアメリカに旅出たせ、ポーランドとの戦争の開始前に——この戦争で作者は彼を巧みに利用することができた——再びカムバックさせた。

スティアフォースとフィンクの性格描写の中に多くの類似点が存在するが、この二つの長編の脇役達、ストーリーの展開する場所は大いに異なっている。この脇役や舞台の描写において両作家の特性が特に表面立って現われてくる。ディケンズにあっては、古いボートで拵えられた、居心地のよい漁夫の小さな家であるが、ディケンズはこの家を本当に寛いだ気持ちで物語ることができた。それに対しフライタークにあっては、舞台は繁華街に位置するユダヤ人の成上り者のまったくもって清潔とは言えぬ家である。イギリスの小説に登場するのは鈍重ではあるが、実直な漁夫達、つまり家族に対する感動的な愛情をいただくペゴティー、誠実で真面目な、勇敢な若者ハム、漁夫のためにささやかではあるが、極めて入念かつ手際よく家計をやりくりするミス・ガミッチである。これら全員が、まさしくディケンズのみが描きえたようなタイプの人間である。ディケンズは愛情の全てを注いで、この「知的に貧しい」がモラルの点でかぎりなく高い立場にある人間達の生活に没入していた。その次が可愛いエムリーである。彼女た金髪で一家の太陽ともいうべき碧い眼をもっている。彼女は家族からはひどく甘やかされていて、自分の犯した過ちに手痛い償いをしなくてはならない。

しかしフライタークにあってはエーレントール一家は人生の現実から取り出された本物の人物である。我々はフライタークがどのように観察方法を心得ていたかを感じとる。そこには、我々がしばしばお目にかかるようなタイプの人間が存在する。つまり老エーレントールは息子への愛のかたちをとって登場するが、普段は金銭への関心しか持ち合せていない。その他は名譽心の虜になった母親と、美しいがコケットで自惚れ屋の娘のように余り共感をもてぬ人物である。彼らと対照的なのは貴族的なタイプのユダヤ人のベルンハルトである。彼は物静かで、どこか遠くの清浄な領域に漂っているような、彼の父の生活と仕事の世界の外に居る学者である。しかしながら我々はこのドイツの小説中の人物に対して、ディケンズ天才によって描き出された人物に対するような生き生きとして興味を覚えない。ディケンズにあっては登場人物の運命が人々の心を捉える。我々は内面的に彼らと親密になり、彼らと共に感じ、体験するのである。これに対しドイツの作家にあっては我々はしばしば人物や出来事の作り話的な性格——とりわけフィンクにおける——を感じとる。

フィンクの企ては全て成功する。彼には常に付があって、少なくとも無事にかつまた駄洒落をとぼしながら窮地を脱することができる。彼の幸運を特徴づけるのは外洋での彼の水泳であって、

海流が彼を陸地から攫っていく。彼は夜に怯え、迫りくる嵐が波を駆り立て、山のように高まってくる。

フィンクは全力を奮って大波と潮流に格闘する。「彼はあざらしか野蛮人の ように ごろごろ転っていく」、そして全エネルギーをふりしぼって努力した。

すでに彼の力が衰え、緊張の余り喘ぎ、無数の火花が目前で踊り出し、半ば意識を失ってあらゆる方向に漂いはじめた土壇場に救いの浅瀬を発見する<sup>42)</sup>。

ディケンズの場合は違う。フィンクの体験と『デイヴィッド・コパーフィールド』中の嵐のエピソードを比較してみよう<sup>43)</sup>。詩人の描写力を正當に評価するために、私はこのエピソードを詳細に叙述してみる。

エムリーを見捨てた後、スティアフォースはイギリスに戻ってくる。彼の乗ったスクーターが接岸するが、揺れる海のために上陸できない。嵐は益々強まり、海は犠牲者をもとめて荒れ狂う。怖しい光景に呪縛され、うろたえ、おびえて、海辺の町の住民達は渚に立ちつくしている。ここで激怒した自然に目を向けてみよう。「山なす大波が逆巻きながら押し寄せてきて、もっとも甚しい時には泡となって崩れ落ちると、そのほんの一部ですらもう町を呑み込みそうに見えた。…白い波頭を見せて大波が雷鳴のごとき音をたてて接近し、打ち碎けると、波のどの部分もが全体の巨大な怒りにとりつかれたみたいでもあり、また絶えずざわめき続けて、かたまって新しい巨大な怪物になろうとしているかに見えた。うねる波の山が谷になり、波立つ谷になった。その谷間を時々逸れた海鳥があてもなくさまよっていった。波の谷間は盛り上って小山になった。大量の水が大砲か雷鳴のようにどよめきながら浜辺を揺がせたので、浜辺はぐらついた……。」<sup>44)</sup>

スティアフォースを乗せたスクーターは依然として格闘していた。大波がボールのように弄んで難破船にしてしまった。マストが一本へし折れて、帆と索具に絡んで甲板の上にぶらさがっていた。船が横揺れすると、このマストと帆と索具のかたまりがハンマーのように甲板に打ちつけた。スティアフォースと船乗り達はそのかたまりを斧で切り落そうと努力し、彼らに超人的な力を与える死の不安の中で働いていた。その時突然巨大な激浪が船に襲いかかり、「人間と樽木と樽と渡し板、それに防波堤をひとかたまりにして逆巻く碎け波の中に洗い流してしまった。」<sup>45)</sup>船にはひっきりなしに鳴り続けていた鐘が一つあった。助けたくともそれができずに岸辺に立ちつくしている群集に警告を発し、また脅すように響いていた弔いの鐘でもあった。難破船は弾け散り、唯一人の生存者であったスティアフォースはしっかりとマストにしがみついていた。

そこに救助にかける最後の望みがあった。ハムは渾身の力とエネルギー、熟練のありったけを賭けて船にたどり着こうと努めた。しかし山なす緑色の激浪がスティアフォースとハムを乗せた難破船を荒れ狂う奈落の底にひき攫って行ってしまった。

このエピソードの中でディケンズは他人の及び難い描写力を見せてくれる。フライタークが我々に見せた嵐の光景はそれに較べると、オリジナルと見較べて冴えないコピー作品のように、見



劣りがする。人々はディケンズが海を知っており、また海という自然の巨大な力をよく知っているのを感じる。何故ならスティアフォースは確かに大胆で有能な船乗りとして描かれており、彼に向かってペゴティー氏は曾つて「航海術を心得た不思議な動物」<sup>46)</sup>という証明書を出している。しかしながら大波に抵抗することは彼にはできなかった。ハムは逞しく、子供の時から海に詳しい。それにも拘らず彼もまた人間の力では敵すべくもない激怒する自然の中で破滅していく。

それに対し、『借方と貸方』のフィンクの漂流の闘いと熟達した能力はありそうにもなさすぎるし、体験し難いことに思える。それは唯フィンクの熟練さと幸運を再び前面に押し出すために、ストーリーに組み込まれたのだ。しかしながらそこには作者の目論見が余計に目立っている。

しかしディケンズにあっては絶望的な救出の努力と大波の中への破滅がストーリーの一部分の破局を形づくっている。さらに真の芸術的天才の発明品であるこのエピソードに潜む深刻かつ感動的な悲劇について言及しておきたい。スティアフォースが「間抜けな若者」<sup>47)</sup>と呼んだハム、スティアフォースによって自分の一番愛していた者、自分の人生の幸福を騙しとられたハムが、そのスティアフォースを救出しようと努力しながら死んでいくのである。

#### 第一節の注

- 1) Erinn., S. 55.
- 2) Robert Prutz, Die deutsche Literatur der Gegenwart, (現代のドイツ文学) (1848-58). II. S. 106.
- 3) a. a. O., S. 106.
- 4) フライタークはまたもや過ちを犯した。すでに『Kunz von der Rosen』でやっていて『回想録』(S. 112)の中で自己批判をしているとおりである。「私のお気に入りの人物はクンツ・フォン・デア・ローゼンであった。彼こそはこの題材を私にとって親しいものとしてくれた本当の主人公であった。それでも彼は質的には二流の劇の登場人物にしかすぎない。スリーリーのための陽気な同伴者、つねに完成していて、活発かつ行動的な主人公というより、むしろ作者そのものである。」また『借方と貸方』のフィンクも同様である。
- 5) DC. I. S. 105 ff. DC=David Copperfield.
- 6) SH. I. S. 43 f. SH.=Soll und Haben.
- 7) SH. I. S. 67.
- 8) SH. I. S. 96 ff.
- 9) DC. I. S. 119 ff.
- 10) DC. I. S. 114.
- 11) DC. I. S. 66.
- 12) DC. I. S. 129 ff.
- 13) DC. I. S. 105 f.
- 14) DC. I. S. 105 f.
- 15) SH. I. S. 169 ff.
- 16) SH. I. S. 283 ff.
- 17) SH. II. S. 159.
- 18) Vgl. z. B. DC. I. S. 358. und SH. I. S. 143 f.
- 19) DC. I. S. 359 ff
- 20) DC. I. S. 372.

- 21) DC. I. S. 369.
- 22) SH. I. S. 153 f.
- 23) SH. I. S. 163 ff.
- 24) SH. I. S. 110 ff.
- 25) SH. I. S. 153.
- 26) DC. I. S. 365.
- 27) SH. I. S. 306.
- 28) DC. I. S. 364.
- 29) SH. I. S. 280 ff.
- 30) DC. I. S. 374.
- 31) DC. I. S. 383 f.
- 32) DC. I. S. 386 ff.
- 33) DC. I. S. 394 ff.
- 34) DC. I. S. 419 f., II. S. 9 f.
- 35) DC. I. S. 397.; ferner I. S. 398, 527, 539.
- 36) DC. II. S. 19 ff.
- 37) SH. I. S. 284 ff.
- 38) SH. I. S. 285 ff.
- 39) SH. I. S. 290 f.
- 40) SH. I. S. 291 ff.
- 41) デイヴィッドとベゴティエ家に出かけて行く前にのべた、スティアフォースの次のような発言「彼らをびっくりさせたら面白からう。原始状態にある原住民を見てみようではないか」参照。
- 42) SH. I. S. 139 ff.
- 43) DC. II. S. 440 ff.
- 44) DC. II. S. 442.
- 45) DC. II. S. 447.
- 46) DC. I. S. 399.
- 47) DC. I. S. 393.

第二節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のユライア・ヒープ(Uria Heep),  
『ニコラス・ニクルビー』のラルフ・ニクルビー (Ralph Nickleby), 『オリヴァー・トゥイスト』のビル・サイクス (Bill Sikes) と『借方と貸方』  
のファイテル・イツィヒ (Veitel Itzig)

『借方と貸方』中の悪人タイプ、ファイテル・イツィヒはディケンズの小説中の同じタイプの登場人物と大きな類似性を見せているので、影響の可能性の有無という問題を排除することはできない。ファイテルの最大のお手本は『デイヴィッド・コパーフィールド』中のユライア・ヒープである。しかしファイテルの生活や行動の中のかなり多くの特徴はまた我々にディケンズの小説中の別な悪役人物を想起させる。たとえば『オリヴァー・トゥイスト』のビル・サイクスと『ニコラス・ニクルビー』のラルフ・ニクルビーである。

ラルフ・ニクルビーとファイテルにあってはすでに青年時代に彼らのその後の職業の際立った素質が示されている。ラルフはすでに学校でささやかな高利貸業を開いている<sup>1)</sup>。彼は文房具や小額の銅貨の資本を有利な利息をつけて人に貸し与え、この金貸業務で最高に有利な期間算定と利息算定を採り入れている。つまり元金と利息とは常に小遣い銭の支給日、土曜日に返済されねばならない。利息額は一定で、元金が月曜日もしくはは金曜日に借り出されようと、それは無関係である。ファイテルはこの問題をもっと簡単に仕組んでいる。彼はペンを盗み、後になってそれを裕福なクラスメートに売りつける<sup>2)</sup>。

ユライア・ヒープとファイテル・イッツィヒはすでに外見的に似ている。ユライアは死人のような青ざめた顔色をしており、髪は短く赤色である。眉毛と睫毛が全然ないので、赤褐色の目は奇妙なぐらい庇護物がなく、陰影もない。そのためユライアを初めて見たデイヴィッドは、ユライアがどうして寝つくことができるかと訝り、あれこれと考えをめぐらすのである。彼は怒り肩で、骨太であり、その腕は長く、骸骨みたいに瘦せた手をしている<sup>3)</sup>。アントンが国道でどんな風にファイテルに出合ったかを思い出してみよう<sup>4)</sup>。瘦せた姿、青ざめた顔色、赤味がかった縮れ髪、悪戯っぽい目とグロテスクな口許の線というのが彼の外見上の目立つ特徴である<sup>5)</sup>。

ユライアとファイテルは彼らの職業柄黒っぽい服装をしている。ユライアは黒い法律家用上着を身につけ<sup>6)</sup>、ファイテルは特に服装で商売をしているので、一年中自慢のフロックを着用している<sup>7)</sup>。こうして我々は空想の世界でこの二人の「差押えをされた」みたいな若者をはっきりと思い浮べることができる。赤毛で血の気のない顔色は黒い服から生き生きと際立ってみえる。

この二人のもっとも重要な相違点は彼らの血統にある。ユライアはキリスト教徒で、イギリスの偽善家タイプの典型である。これに対してファイテルは紛れもないユダヤ人である。

この若い二人の労働領域と職業活動とを比較してみよう。ユライアは代理人ウィックフィールド(Wickfield)氏のオフィスで勤勉な書記である。ついでながら彼はドアマンの仕事も引きうけている。彼は客を主人のところに案内して行き、客の車や馬の面倒をみてやる<sup>8)</sup>。同じくファイテルは一種の「よろず雑用係」である。最初彼はエーレントールから最下等の仕事に使われた。彼は台所用品の買い物をし、長靴や衣服の手入れをしなくてはならない<sup>9)</sup>。彼は自分が有能、有用なることを証明してみせてから、切望していた帳場のポストを手に入れ、書記になる。しかしそのことで彼の際限のない名誉心と所有欲は依然として満足できない。

若者らしい未熟さから彼は富裕な男になる方策を夢みている<sup>10)</sup>。倦むことなく彼はその方策を求めようと望んでいる。彼は実際にまたそれを見つけるが、考えていたのとは別な方法で見つける。彼はある零落した弁護士に授業をうける<sup>11)</sup>。弁護士は彼に先づ法律の知識を授け、次いで抜道と回り道を教える。こういうやり方で法律的義務を回避することができる。また自己の利益のために落し穴や抜道をも教える。似通った勉学欲がユライアにも認められる。ファイテルがヒップス(Hippus)と一緒にブランデー酒場の片隅に蹲まって頬をほてらせ、燃えるような目つきで

彼の「学問」を貪りくらうように、ユライア・ヒープは深更になってもまだ仕事場に座って、燃えさかる注意を払って部厚い本を読み耽っている。読書の際彼の人差指は一行一行を追い、べとべとした指の跡が紙面を蝸牛のようにのたくっていく。何をそんなに熱心に読んでいるのか、という問いに彼はこう答える。「私は法律の知識を増やしているのです。私はティッドの練習問題を勉強しています。コパーフィールドさん、ティッド氏はなんと見事にこの本を書いたことでしょう！」<sup>12)</sup>

ユライアは立身出世を待ち侘びている。彼の貪欲は際限を知らない<sup>13)</sup>。

反吐の出そうな卑屈なやり方で彼は自分の控え目な態度を自慢し、それを強調するチャンスを逃がさない。「私の母と私はこの世で一番取るに足りぬ人間です」と彼はデイヴィッドに向かって言う<sup>14)</sup>。「父の職業もとてもつましいものでした。墓掘人夫だったのです。」

デイヴィッドがユライアに、いつの日かヴィックフィールド商会の株主になれるかどうかを訊ねた時、ユライアは出すぎたことだとやっきになって拒否反応を示すのである<sup>15)</sup>。そこに我々は、全然話題にならぬのに、デイヴィッドがいつかヴィックフィールドの許に参加するかも知れぬというユライアの不安を感じとる。デイヴィッドの抗議にも拘らずユライアは再三その問題に立ち戻っていく。不安に駆られながらユライアは自分の競争相手を見守っている。ユライアは自分の名誉心を抑えようとするがうまくいかない。見せかけの謙虚という仮装は彼の激しい欲望を隠すことができない。「私のような人間ならもっと上手にやるでしょう。高望みをしないのです」とユライアはデイヴィッドに言う。しかし心の中では全く別なことを考えている。

ファイテルもまた自分の利益に心配りしているときには、いつも謙虚に身を屈める、如何わしい魅力で効果をあげようと馬鹿丁寧なお世辞をひねくり出す。彼はへりくだり、卑下してひどく野暮なお辞儀をしている<sup>17)</sup>。

ファイテルは今やもう卑しい仕事はしなくてよいし、事務室にポストが空いたというエーレンタールの通知をへりくだって受け取る<sup>18)</sup>。立派な作法を学ぶべく週に一度エーレンタールの家族と共に食事を取ることを認めてほしいという彼の控え目な主人への申入れは聞き入れられる。こうして彼はすでに大きく前進し、やがてエーレンタール商会に不可欠な存在となりえた。

同様にユライアもヴィックフィールドの仕事を益々多く見てとった。ヴィックフィールドは赤ブドウ酒にひどくおぼれ、働けなくなり、譫妄状態の瀬戸際まで追いやられていたので、全体を展望する能力を失っている。もし代理人がこのような神経症的状态にいれば、通例ユライアによって大事な業務に呼び戻されるのだが、代理人はそれをやめることができず、ユライアは一人でその職務を処理した<sup>19)</sup>。

このようにユライアの影響力は日に日に増大し、間もなくヴィックフィールドは、策略に長けた秘書のはりめぐらした罠から逃げ道を見出せなくなる。

同様にエーレンタールは彼の書記がかけた罠に巻き込まれる。ファイテルは、主人とロートザ

ッテル男爵の抵当権設定の件を立ち聞きした途端に、決定的な影響力を持つことになる<sup>20)</sup>。今や彼は原動力である。つまり、彼は軍師ピンクスを操り、エーレンタールを思いのままに操縦することが可能になる。間もなくロートザッテルもまた彼の罠にかかる<sup>21)</sup>。抵当証券を盗んで策略はうまくいく<sup>22)</sup>。男爵とエーレンタールは破滅する。仲介しようとするベルンハルトは死亡してしまふ。ファイテルはしかし成功者として凱歌をあげる。

ディケンズの作品に見出されるフライタークのお手本もまたその権勢の絶頂に到達する。彼はヴィックフィールド商会の共同経営者に成りおおせる<sup>23)</sup>。かくて悪魔めいた喜びをいだいて彼はデイヴィッドに、自分の以前の主人をすっかり押え込んだと、語ってきかせる<sup>24)</sup>。彼の究極の目的はアグネス (Agnes) との結婚である<sup>25)</sup>。彼は暇な時には絶えずこの少女の囲りをぶらつき、この少女がデイヴィッドと交き合うのを意地悪く見守っている<sup>26)</sup>。

ファイテルは独立する。ヴィックフィールドの庭の中に私的な事務所を造りつけ、そこに自分の昔の主人でかつ現在の共同経営者の快適な家具調度を備えたユライアのように<sup>27)</sup>、ファイテルは住居兼用の優雅なオフィスに住み込む<sup>28)</sup>。ラルフ・ニクルビー<sup>29)</sup>やエーレンタールの入口の扉のように、彼の入口の扉には四隅を斜めにカットした真鍮製の表札が輝いている<sup>30)</sup>。この表札をファイテルは曾つてエーレンタール家に入店した際大いに賛嘆し、自分の願望の目標のシンボルと思ったものである<sup>31)</sup>。

ユライア・ヒープは自分の母を引き取り、一緒にヴィックフィールド家の一番上等な部屋に住まう。ヴィックフィールド自身はもはや自分の意見なるものを述べない。ユライアはその上、彼が言うべき口葉を指図する<sup>32)</sup>。

ユライアの母はアグネスの傍を離れない。母は監視人として雇われており、ヴィックフィールドの娘にユライアの忠誠心と有能さを愈々もって納得させなくてはならない<sup>33)</sup>。事態はしかしユライアが目論むほどに捗らない。ユライアがヴィックフィールドを前にして、アグネスに求婚したいと話をもち出した時すでに、この無力な男に大きな変化が生ずる。彼は恐しい叫び声をあげ、髪を掻きむしり、彼を宥めようとするデイヴィッドから身をふり離そうとする。デイヴィッドに向かって彼は自分自身とユライアに恐しい訴えをする。「お前には、私の首にかかっている石臼が見えるだろう。」ユライアは暫くの間チャンスがないことを見抜かざるをえない<sup>34)</sup>。同様ファイテルは彼が会社をやめてから落ちぶれたエーレンタールの会社を自分の会社と合併するのが狙いである<sup>35)</sup>。彼はロザリーエと婚約しようとするが、彼の計画は彼女とエーレンタール夫人の抵抗にはぶつからないが、しかしエーレンタール氏自身にはそれだけに益々大きな抵抗に出合う。彼は息子の死亡以来、一日中何も仕事をせず、半ば呆然自失の態で帳場に座り、訳の分らぬ独り言を呟くのである。「彼は悲惨な没落の像そのものであった。そこでは精神は第二の揺り籠への道で肉体を追い越して走っていくのだ。」<sup>36)</sup>ファイテルは昔の主人を訪ね、友好的な調子で語りかけ、二つの会社の合併と彼とロザリーエとの結婚がもたらす利益に注意を向けさせる。しかしエ

ーレントールは拒否する。彼は突然虚ろな状態から目を覚まし、イッツィヒが息子ベルンハルトを墓の中から連れ戻せれば、イッツィヒの計画に賛成しようと約束する。思いもかけず自分の大きな不幸全体が彼の意識にのぼり、ヴィックフィールドのように、自分の人生の幸福の破壊者に対する怒りに襲われる。彼は相手を脅し、両の拳を握りしめ、ファイテルを帳場から追い出してしまう。

ユライアもファイテルも共に最後には司直の手にゆだねられる。ユライアは彼の手の内を読んだ書記のミコーバー (Micawber) によって正体を暴かれる<sup>37)</sup>。ミコーバーは数人の証人の居る前でユライアの誤魔化しを実証する。ユライアは借用証と署名を偽造し、巨額の金を着服し、悪賢い策略を用いてヴィックフィールドを破産の淵に追いやった。数年にわたりこういうやり方で略奪し強奪していたのである。

しかし今や年貢の納め時であった。偽造した証券と盗んだ金を弁済し終えるまで、彼は座敷牢に入れられる。やがて彼は見逃してもらい<sup>38)</sup>、別の場所で詐欺行為をはたらき続け、ついには刑務所に入る<sup>39)</sup>。

ファイテルの行為の結末はユライアのそれとは異なる。それに代ってディケンズの他の小説のエピソードがお手本に考慮されている。『オリヴァー・トウィスト』に出てくるビル・サイクス最後の犯罪とその結末をファイテル・イッツィヒの殺人と死と較べてみよう。

ビル・サイクスは恋人ナンシー (Nancy) を打ちのめす<sup>40)</sup>。殺人者は手で目を覆うが、それは死に至るまで無情に、意味もなく荒れ狂う犯罪者に誠実を尽し、今や膝の上で血を流しながら同情を乞うこの少女を見ないためである。しかしビル・サイクスには同情など理解できない。

ビルは死体の上に一枚の布切れをかけ、節だらけの杖を火の中に投げ入れ、血を拭う。それから彼は逃亡する。休みなく逃げまわる。とある生垣の陰で疲労困憊して短時間寝るが、またあてもなく放浪を続けていく。

ある旅館に腰を落着るがどこかの商人が彼の企みを妨害する。商人は洗剤の宣伝をしていてその目的のためにビルの帽子の血の染みを抜こうとする。ビルは帽子を奪いとり、急いで通りに出ていく。そこで彼は背後に、すでに知れわたった彼の殺人事件が語られるのを聞く。彼は打ち倒されたナンシーのぞっとするような姿に付け廻されながら、逃亡を続ける。彼は闇の中に彼女の姿を見、その生気を失った目が自分に向けられているのを感じる。幽かな呻き声が聞える。ある火災で彼は人命の救助に手を貸す。彼は息つく間もなく消火器を使い、大胆にも揺らぐ破風屋根にのぼっていくが、彼は不死身である。

鎮火後消防士たちは彼の行為と逃亡した殺人犯のことを話題にしている。不安になった彼は再びその場を逃げ去る。もはや彼はどこにも安堵を見出せない。

ファイテルにも同じことが起る<sup>41)</sup>。彼は、彼の師であり共犯者でもあり、ひどい酒浸り者のヒップスが有価証券の盗難を他人に漏すかも知れぬこと、特に彼が警察に追われていることを恐れ

ている。それ故にヒップスを隠し、川淵に立っている二軒の家をつなぐ梯子を渡って隠れ家に連れていく。その梯子は一番下のステップは水に洗われている。

ファイテルに案内されたヒップスは闇の中で手探りしながら階段を下りていく。彼はそこに水を見て、疑念が生じ、必死に身を護り、救いの叫び声を立てる。ファイテルは我を忘れ、憤怒のあまりヒップスの口を手で押え、彼の帽子を顔に深く下げ、マフラーをつかんで、彼を川の中に投げこんでしまう。重々しい落下の音、噴き上る水しぶき、ゴボゴボという物音がして、やがて静まりかえる。ファイテルは戻ってくる。彼はぐっすりと睡眠をとりたいと思い、パジャマと暖炉の火のことを考える。しかし突然の苦痛、胸を締めつける圧迫感と不安を覚える。再び眼前に川の水を見る。その上にヒップスの古い帽子が浮んでいる。疲労しきって彼は帰宅する。正直であることを思い出させる彼の母の姿が脳裡に浮んでくる。再度圧迫感が襲う。

とうとう彼は眠り込んでしまいが、それはまたしても僅かな時間のことである。それから再び良心の叫びが彼に警鐘を鳴らす。苦痛を感じ、不安に苛まれ、追い廻されながら生き続け、彼は全ての人間を怖れる。彼は意識を麻痺させる気晴しごとが必要になる。彼は途方もない大声で知人と話し、声を立てて笑う。しかるに彼が感謝しなくてはならぬあの小柄な男が何度も姿を現わす。殺された人間がどこにでも彼を追ってくる。

我々はこの二つのエピソードが大層似通っていることを知っている。両作品とも殺人者が、無思慮に行なわれ、由々しき結果がついてまわる。

この二つの小説では殺人者はそのもっとも誠実な仲間を打ち殺している。良心の苛責が詳細に劇的に叙述されている。殺人者は殺害された人間の像に追いまわされ、それは彼らを放って置かない。くたくたに疲れきった殺人者は僅かな時間だけ眠りを見出す。そしてまた追い廻しが新たに始まる。

さて今後はファイテルの行動の結末にかかろう<sup>42)</sup>。ロザリーエとの婚約が祝われなくてはならない。老エーレントールは椅子にのせられて連れていかれる。彼は若いカップルを祝福してやらなくてはならない。しかし彼がイッツィヒに視線を向けると毒づくのである。その瞬間ファイテルは彼の使い走りの若者から警察がやってきたと警告をうける。途端に彼は姿を晦ませてしまう。おそろしい早さで彼は夜の闇の中に逃げ込む。彼はどこへ行くべきか？ 彼が知っているのは、この時刻には海へ行く列車がもうないということである。

彼は市街地の暗い街路に走り込む。用心深く夜番を避ける。彼はもっとも厭っていた場所に魔術にかけられたみたいに惹きつけられていくのだ。

犯行現場に近づいた時、溺死した人間の姿が前より一層彼を苦しめた。

彼は木造の歩廊の階段を下りていき、ゴボゴボ音を立てる川を徒渉して隣家の上り段にやってくる。もう一つ角を曲れば彼は上り段に着いたのだ。そこで彼は驚きの余り川の中に倒れこむ。目の前の杭の上にヒップスが屈みこんだ姿で腰をおろしていて、殺人者の胸に掴みかかる。ファ

イテルは流水の中によろめきながらはまりこみ、流水は彼を受け入れて現世の正義から彼を奪い去っていく。その数分後追ってきた警官が姿を見せる。

まったく同じ方法で『オリヴァー・トウィスト』で平行するシーンが展開していく。これこそはおそらくフライタークが影響をうけたものである。『借方と貸方』中の一つの舞台、つまりユダヤ人の旅籠はこのイギリス小説の舞台を想起させる<sup>43)</sup>。このイギリスの小説でも物語の筋は一軒の古い、人の住まぬ、半ば崩れかかった家で展開する。ここが詐欺師の隠れ家に使われている。家は沼沢地の堀割に囲まれて、テムズ河の氾濫時には水面下に没してしまう。『借方と貸方』におけるように丸太の回廊がテムズ河畔の家々の背面を連絡し、ドイツの小説で描き出されているように、その光景は同様にどんよりとした、物悲しい印象を与えている。両作品とも回廊には貧しい人々の洗濯物がかかっている、『借方と貸方』のみでなく、『オリヴァー・トウィスト』では多分なおのこと、フライタークが言うように「画家と猫とあわれな奴」を除けば、こんなところに滞在することをなつかしく思うなどは口に出せない<sup>44)</sup>。この泥棒の巣窟の上の部屋にはビル・サイクスの悪い仲間が集っている。彼らは警察の手から逃れてきて、今や安全だと思っている。突然殺人者が姿を現わす。良心の苛責に耐えかねてびっくりするほど変り果て、見分けがつかぬほどになっている<sup>45)</sup>。

元々彼はファイテルのように、海外に出て命拾いしたいという意図をもっている。しかし彼はその計画を再び斥けてしまった。今や警察が彼を追いつめている。警官が近づいた時、ビルは天窓から逃れる。

彼は最後の脱出の試みを冒す。煙突に一本のロープを捲きつける。この家の見張りない側面を伝って逃亡するために、ぬかるみの堀割りに降りようとする。脇の下をしっかりと固定するために、ロープの結び輪を頭のまわりに捲きつける。

その時彼は突然大声を上げてよろめく。ナンシーの眼が彼を凝視しており、彼はバランスを失って屋根から落下する。首にかかったロープの輪がピンと張る。手足がびくびくと動き痙攣する。こうしてビル・サイクスは罪を贖うのである。

さらにディケンズの描いた別なシーンを手短かにスケッチしておきたい。それはフライタークに影響を与えたものかも知れない。ラルフ・ニクルビーもまた良心の復讐の女神によって死に駆り立てられる。彼が追い廻し、苦しめたのが自分の息子だと分った時、彼の復讐と儲けの計画の全てが駄目になったと知った時、彼はチアリブル家から逃れ去り、泥棒のように街を忍び歩く<sup>46)</sup>。それは真暗な夜のことである。その雰囲気は『借方と貸方』と似通っている。風が黒い、陰鬱な雲を駆り立てていく。ファイテルにとってユダヤ人の旅籠が怖いように、ラルフには静かで無気味な自分の家が怖い。にも拘らず家に踏み入り、曾つて彼の貧しい、ほったらかしにされた息子の寝ていた略奪者の小部屋に昇っていく。「雨と雹がガラスに当たって音を立て、煙突は呻き、身を揺すぶる。脆い窓が風にきしんでいる。」<sup>47)</sup>翌朝ラルフ・ニクルビーが鉄鉤で首を吊っているの



が発見される。

このように我々はまたしても、地上で善が勝利を占め、悪人はその行為によって自からを裁かなくてはならぬ、というモチーフを見出すのである。

#### 第二節の注

- 1) Nich. N. (=Nicholas Nickleby) I. S. 6 f.
- 2) SH. I. S. 21.
- 3) DC. I. S. 271 f.
- 4) SH. I. S. 20.
- 5) SH. I. S. 479.
- 6) DC. I. S. 272.
- 7) SH. I. S. 118.
- 8) DC. I. S. 272. 275.
- 9) SH. I. S. 49 f.
- 10) SH. I. S. 23.
- 11) SH. I. S. 121 ff.
- 12) DC. I. S. 290 f.
- 13) DC. I. S. 286.
- 14) DC. I. S. 291.
- 15) DC. I. S. 292.
- 16) DC. I. S. 293.
- 17) SH. I. S. 116 f.
- 18) SH. I. S. 135.
- 19) DC. I. S. 344.
- 20) SH. I. S. 252 ff.
- 21) SH. I. S. 479 ff.
- 22) SH. I. S. 530 ff.
- 23) DC. I. S. 455 ff.
- 24) DC. I. S. 469.
- 25) DC. I. S. 470 f.
- 26) DC. I. S. 459. 465. 475.
- 27) DC. II. S. 167.
- 28) SH. II. S. 68 ff.
- 29) Nich. N. I. S. 8.
- 30) SH. II. S. 68.
- 31) SH. I. S. 47.
- 32) DC. II. S. 102.
- 33) DC. II. S. 168 ff.
- 34) DC. II. S. 176 ff.
- 35) SH. II. S. 75 ff.
- 36) SH. II. S. 77.
- 37) DC. II. S. 368 ff.
- 38) DC. II. S. 404 ff.
- 39) DC. II. 521 f.

- 40) Ol. T. (=Oliver Twist) S. 320 ff.
- 41) SH. II. S. 338 ff.
- 42) SH. II. S. 377 ff.
- 43) Ol. T. S. 339 f.
- 44) SH. I. S. 55.
- 45) Ol. T. S. 342 ff.
- 46) Nick. N. II. S. 409 ff und S. 425 ff.
- 47) Nick. N. II. S. 423.